

大正六年九月十四日（星期三）出版（每册一角）
 大正十三年五月一日發行（每月一角）
 （第七輯第五號）



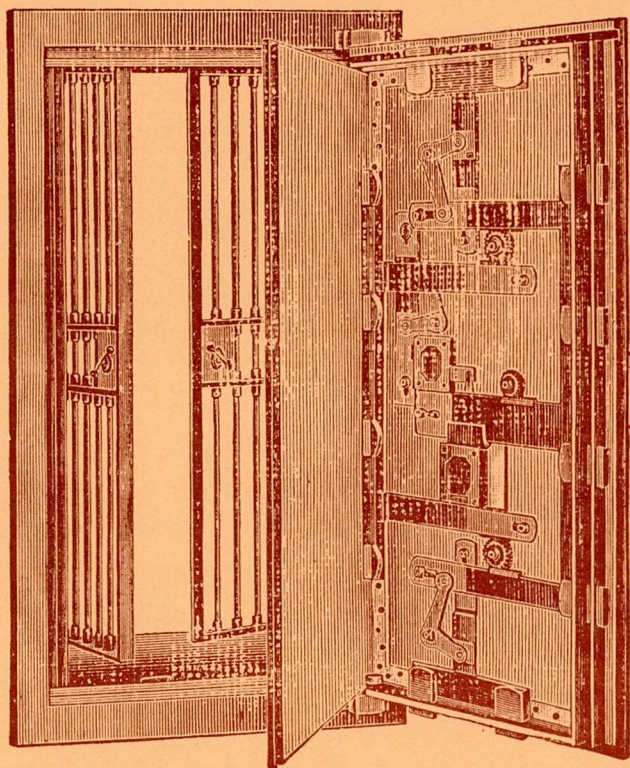
建築協會

第七輯第五號

日本建築協會

大正十三年五月一日

耐震理想鐵扉の出現



金庫扉製造界の權威

工場
東京第一工場 東京市京橋區佃島壹丁目
全 第二工場 全 深川區東元町
京都分工場 京都市松原通り大宮西入

營業所
東京市京橋區岡崎町二丁目
京都市松原通東洞院東入
大阪市東區淀屋橋筋(道修町)
神戸市楠町六交叉點西

大谷金庫店

店主 大谷榮之介

顧問工學博士 細木松之介

獨逸人技師 ア・シューハルト

理想暖房器出現

THE AUTOMATIC Gas Steam Radiator

MANUFACTURED BY
Automatic Gas Steam Radiator Co.
U. S. A.

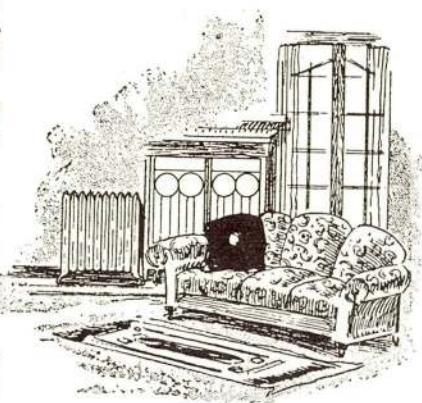
經費節約 取付簡單
衛生第一 體裁優美

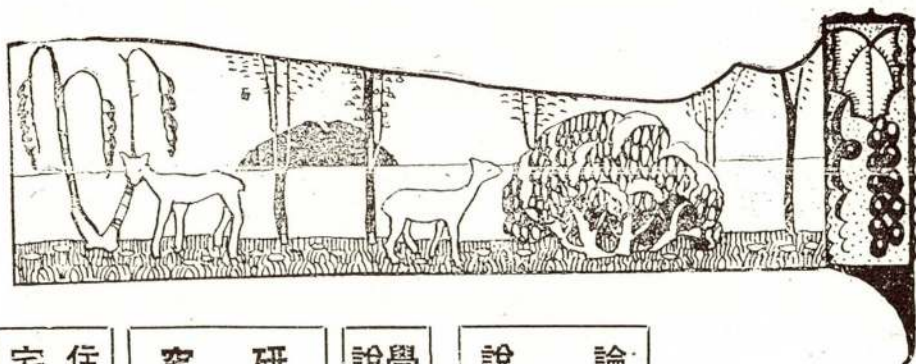
詳細最寄支店ニ御問合被下度候

日本總代理店

內田商事株式會社

神戶 東京 大阪





建築と社會 第七輯第五號目次

口 繪 藤田銀行難波支店

◆卷 頭 辭 猫の藝術觀 一

◆建築材料の國産化提唱 池田 宮彦 二

◆使用者側より觀たる
現時の建築 神戸高等
工業學校長 廣田 精一 九

◆「コンクリート」より「鐵筋」
コンクリート」まで (三) 中村 鎮 五

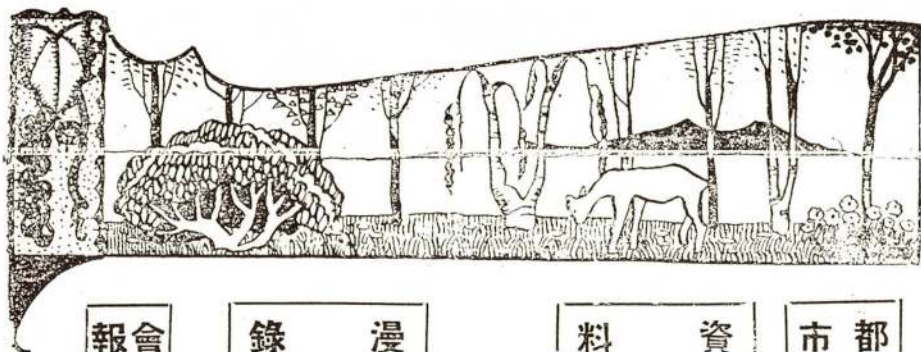
◆地震と耐震建築 無漏樹林 三五

◆混凝土施工能率の鐵筋
混凝土結構の強度に及
ぼす影響 八木幸次郎 三

◆住宅の零圍氣に就いて 安野二位夢 六

論 說 學 說 研 究 宅 住





報會

漫 錄

資 料

都 市

◆震災と都市問題雜記(畢)……………楠原祖一郎・四

◆ばりあな——けな——でんでら——ろくそる

——續埃及遊記(四)——……………天沼 俊一・四

◆畫界に於ける新傾向(二)……………齋藤 與里・六

◆スカイライト……………六

◆建築の世紀末……………櫻木 浩・五

◆夜への頌……………廣岡峰太郎・七

——建築叙情篇(四)——

◆通俗建築講演會を聽きて……………かうそん・五

◆日本建築協會四月中記事……………



GOOD

和洋家具の製作
室内裝飾の設工
其他一般木材加工

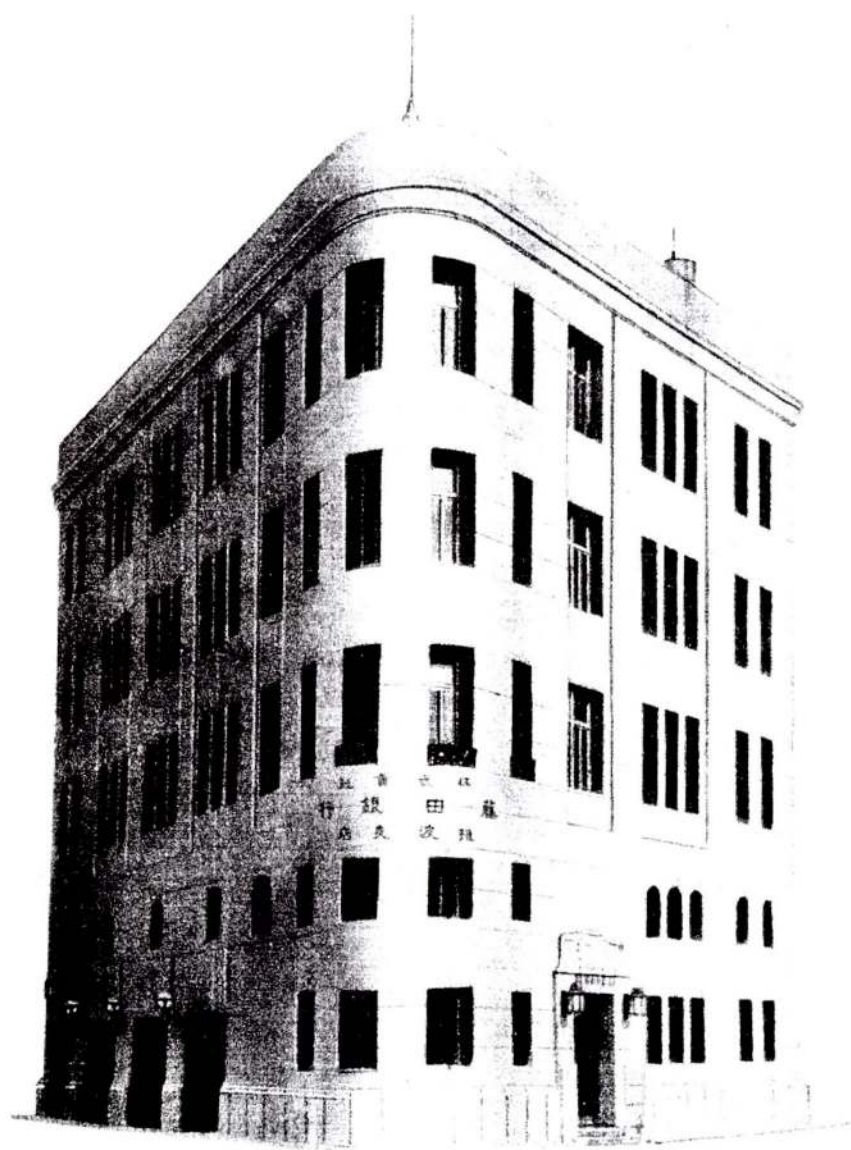
合資
会社

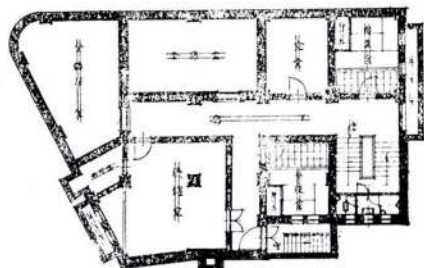
内外木工所

京都
支店
大阪
支店
東京
支店

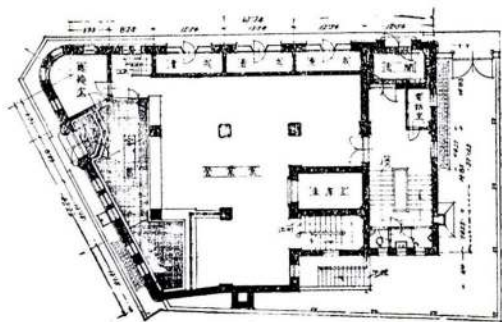
大塚市東區元町四丁目心算橋
電話 日本局一七三六番
大阪市西區市岡町六七四
電話 西三〇六〇番

FURNITURE

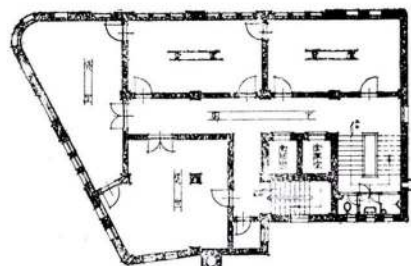




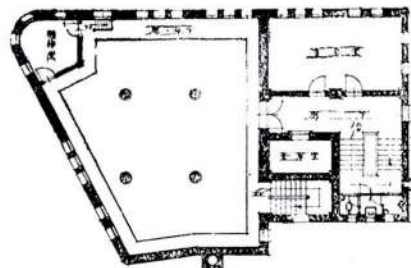
地下一層平面圖



basement floor plan



第三層平面圖



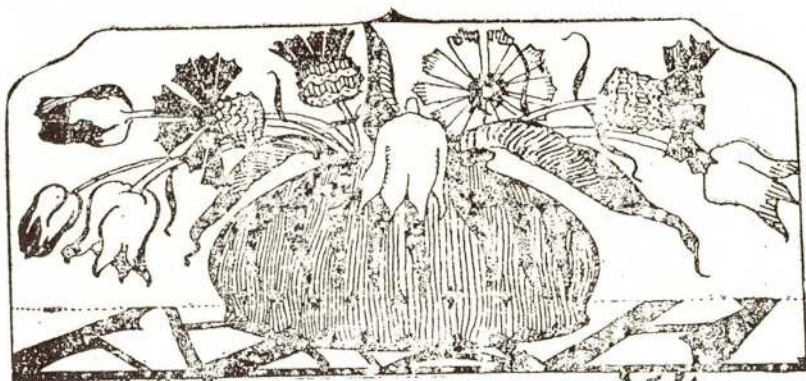
第二層平面圖





猫の藝術感

美術の目的は情緒を表はすのである。猫は犬が這入つて来るさ爪先で床の上を歩いて、地にも觸れずといふ有様で、烈しくウーヤー唸つて脊を曲げ、何とも云へぬ壓め面をするが、其時こそ猫は最も眞純な藝術家の態度を發揮して居るのである。それは、猫の身體を蔽ふた毛では莫く、感激を現はすに用ひた態度である。……ペーカーペンター氏「天使の翼」



説

論

建築材料の國產化提唱

池田宮彦

余は此處に對外爲替暴落に鑑み邦家の爲めに切に建築材料の國產化を提唱するものである。

歐洲の大戦漸次擴大するや大正三年遂に我國も其の渦中に投じ米國亦之れに由はり世界大戰となつた。折柄歐洲各國の製造工業は一頓座を來し物資の缺乏は全市場に波及するに至つたが獨り我國は之れに反し、經濟界は頓に活氣を呈し、製造工業隆盛となり輸出殷昌を極め、世界市場を稱するも敢て憚らざる有様となつた其の結果莫大なる金貨の潮は我國へ押し寄せ謂所戦争成金國として指を屈せらるゝに至つた、實に大正八年末には在外正貨拾參億五千五百萬圓となり、翌九年には内外正貨併せて貳拾壹億八千三百萬圓を擁するに至つた。

かゝる正貨の膨脹は我國の物價を頓々拍子に躍り上げ、生活難が到る處で叫ばれ悲慘な種々の事件が頻出した。他方に於ては衣馬足り過ぎて贅澤の底を知らない徒輩の筈出した事も腦裏に残つて居る。

茲に又、建築界は未曾有の繁忙期を迎へ、各大都市には盛に不

燃質材料を用ひた歐米風のビルディングが建設せられて其の發展目覺しく、パンブーハウスと貶した外國人をして全く驚異の眼を見張らしむるに至つた。まことに建築界にとつては祝福すべき事ではあつたが、願れば其の發展は單なる模倣に過ぎなかつた事を知るのである。而して獨逸屈するや、平和の風と共に我國の財界は俄に不況に陥つた。各國の工業漸次回復するに及び、我國の輸出は日に月に衰微し、日貨は次第に世界の市場から驅逐せられた。然るに多年好況に馴れた國民は其の贅澤を止めず、何等國家の經濟を考慮することなく猥りに歐米の新らしきものゝみを迎ふるに日も尙足らざる有様であつた。

果然我國の貿易は歲々年々輸入超過を示し、さしも積み上げられた在外正貨も歳月と共に減じ、遂に大正十二年末には僅か四億四千五百萬圓となつてしまつた。

客年九月一日關東の地大いに震ひ火災相次いで起り、帝都を初め關東の邸市を一朝にして烏有に歸せしめた。報一度到るや萬國皆其の慘狀に驚いたそして我國民は舉國帝都の復興に従事すべき秋が來た。

輸入超過——大震火災——復興——茲に於て我國の對外信用は世界の市場から忽ち、二、三等國に蹴落されてしまつた。當然の成行として我國の對外爲期相繼は釣瓶落しに落された、去年の秋から冬へかけて尙四十八弗臺を採つて居たが、春以來悲惨な暴落を續けて今や四十一弗内外となつた、而も前途に輸出超過の見込は更に無い、自然尙下らざるを得ない實に哀れた状態となつた。

此の暴落の原因に就ては或は政府の處置良しきを得ないとか、種々の風説は有るが要するに引續く輸入超過の反映であつて在外正貨の缺乏と、大震火災が其の主なるものであることは明白である。故に是れを機として余は特に國家の爲めに建築材料の國產化、即出來得るだけ内地產の建築材料を今後のビルディングに用ふることを主張するものである。以下各材料について今少しく具體的に述ぶることを諒とせられよ。

鐵 骨

現今の大建築の主要なる材料は鐵とセメントであつて殊に四、五階建以上には鐵骨構造か又は鐵骨鐵筋コンクリート構造を最も適當とする。關東大震災火災の結果に顧るも此の構造が最も優れて居ることを證せられた、自然今後も盛に此の構造が用ひらるゝことと思はれる。然るに近來建てられた大きなビルディングの鐵骨は主として外國殊に米國から輸入せられた、而も其の多くは加工材を購入して居つた。之れは國家經濟から見て如何であらうか、一考を煩はしたいと思ふのである。

建築用鐵材は八幡製鐵所から供給を受得るのみならず、其の上勞働賃金の高い外國で加工をする必要は無い。たとへ米國は機械工作が我國よりも發達して居るとは言へ、自分の調査した所では同一程度の加工なれば内地の方が安いと思ふ。尙又鐵骨を輸入するに於ては輸入税を比較する必要がある、加工材と原材料との輸入税率の差を考へねばならぬ、次に是を比較して見よう。

加工材の輸入税 (百斤ニ付) 貳圓八拾錢

原材料の輸入税率 c i f 價格の一割五分

今一例を擧ぐれば、加工材一英噸八十五弗(c i f)の時に輸入税は四十七圓に當るが原材料では、同じ時に鐵材基本價格は白封度に付一弗七十五仙で工場より船積迄の運賃及紐育より日本迄の船舶運賃を加へて一英噸約五十五弗半、此輸入税は一割五分の、八弗三十仙、即約十七圓である。加工材と原材料との輸入税差額三十圓となる。

次に加工材を船舶によつて運送する時は陸揚後可なり多くの損傷を發見する此の手直し料金を要することを考へに入れねばならぬ、

型鋼の種類については比較して見ると、普通のL、工、C、形鋼は我國でも出来るが特種な形鋼即ベスレームH形断面の如きは柱として極めて都合のよい材料であるが他の會社では産出し得ない、此の點は確に優れて居る點であるが、之れとても鋳造形鋼とを適當に組合すれば彼に匹敵する断面を得られる

此の場合、組合せの爲めに加工費の嵩むことは明であるが、此の加工費を支拂つても、値段に於てはベスレヘム断面と競争することが出来るのである。其の理由はベスレヘム断面には特に其木價格の外に割増料金がある之れは時に變動があるが大體次の通りである。

ベスレヘム H

四十仙(百封度ニ付)

ベスレヘム I (二十四吋以上)

三十仙(百封度ニ付)

ベスレヘム I (十八吋以上)

二十仙(百封度ニ付)

(以下省略)

之れに對して米國標準型は

I 十五吋以上

十仙(百封度ニ付)

I 十五吋以下

無シ

E、I、

無シ

L、六吋以上

十仙(百封度ニ付)

即此の値開がアメリカで加工する場合でもベスレヘム断面に對して組立断面を用ひて競争し得る理由である。

今一つ期限の問題であるが必らずしも外國の方が速いとは限らない、たとへ機械を多く使つて工場でも早く出来ても鐵道荷車或は船舶の都合が理想的に配置せらるゝことはむしろ稀であるから何れが早いか斷言することは出来ない。

以上を總括して國家經濟の立場から言つても亦個人經濟から視ても鐵骨は内地産を用ゆるか、或は止むを得ず外國材料を用ゆる場合に於ては内地加工かを、主張するものである。

鐵筋

鐵骨構造に亞いで耐火的の構造は鐵筋コンクリート構造であつて其の設計宜しきを付ば耐震構造としても理想的である、此の鐵筋用材料について一言したい。

鐵筋材料としては丸棒の外に、カーンバー。リップバー。コルゲेटテツトバー。等の異形棒も盛に用ひられて居るが、此の異形棒は殆んど總て米國產であつて我國では製造し得ないものである、故に若し異形棒を用ゆれば自然外國產の品を用ゆることとなる。而して異形棒を鐵筋として用ふる主眼は棒の表面に於ける凹凸によつて附着力或は抗滑力を増大し得るが故に鐵筋の先端を屈曲してコンクリート中に錨着する必要が無いと言ふ點にあつた。即ち鐵筋の加工費を減じ尙安全を得られた。然るに今回の關東激震によつて被害を蒙つた鐵筋コンクリート造建築の多くは異形鐵筋を用ひ鐵筋が先端を充分にコンクリート中に錨着せなかつた構造物であつた。そして今迄餘りに異形棒の効能書に頼り過ぎた傾きが在つた結局異形棒でも丸棒でも同一手法を施さねば同じ強きを得られないことを知り得たのである。然らば其の表面の凹凸による附着力或は抗滑力の効果は余邊にあるか、甚だ疑はざるを得ない、或は單に机上の空論では無いか、又は小さい實驗體のみに當て嵌つて大きな建物には異つた結果を來すものではなからうか（外國で行はれた實驗の結果でも附着力は反つて減つて居るが只滑力が増すことを報告せられて居る）

コンクリートが硬化するに當つて收縮をする、此の爲めに鐵筋の表面に凹凸のあることは反つて相接する面のコンクリートを損傷し是れが附着力又は抗滑力を大いに減殺するものでは無からうか、之れが大きな疑問として實際問題の上に殘されて居ると思ふ。

價格の點に於ては異形棒の方が高いのみならず、硬くて丸棒よりも加工が困難である。

以上の理由を以て余は鐵筋材料としても、なるべく内地產の丸棒を用ひ内地の製造工業の發達を計り併せて輸入超過防止策としたい。

エレベーター

(エレベーターは建築材料では無く、建築の一要素であるが此處に併記す)

近來の高層建築にエレベーターは缺くべからざる設備の一である。古來高層建築を有た無かつた我國にエレベーターの發達せなかつたのは當然のことであるが歐米に於ては早くも數十年制から研究せられ近來は其の發達殊に著しく、オートス。エー、ビー、シー。ウオーナー。等の大會社が各種のパテントを有すると同時に盛に製造に従事して居る。殊にオートス會社は其の數に於ても質に於ても全世界に覇を稱へ、エー、ビー、シー之れに次ぐことは誰れも知る所である。

然るに我國に於ては漸く數年前、日本エレベーター會社の設立を見たのみであるが、同會社は大いに研究を積み特種な部分の製作を除いては近來面目を一新し、米國の専門家も舌を巻いて居ると聞く。然しまだ新しい大きなビルディングには殆んど外國製品が用ひられる有様である。斯く外國製品の用ひらるゝ理由を考ふるに、外國製エレベーターが我國製よりも必らずしも優れて居ると言ふ譯ではなく或は我國の技術家にとつては比較的新しい設備である 爲めに、良否の判斷に苦しむ結果、外國一流會社製品なれば先づ間違ひは無からうと云ふ考へと、建設者に於ても外國第一流會社の名聲と歐米先進國崇拜の心理に支配せられて外國製を採用する場合が多からうと思はれる。元來エレベーターなるものは其の設計及製作には相當の經驗の要ることは勿論ではあるが、特種の部分 ウォームギヤー或はガイドレール等を除いては左程困難な又は六ヶ敷いものであるとは思はれ無い。是としても兵器の製作に比較すれば餘程簡單なものであると思ふ。我國の兵器製作が非常進歩發達を遂げて居るのに拘らず、獨りエレベーターが發達し得ない理由を認むる事は出来ない。只外國製品に壓倒せられ、需要が僅少であるが爲に自然研究と製造に努力する事が經濟的に均衡を保ち得ない爲めであると思はれる。かくて何時迄も徹底的研究に没頭することを逡巡し其の結果莫大な金を年々外國へ支拂ふのはまことに遺憾な次第であ

る。此の上は製造會社は多少の物質的犠牲を捧げる覺悟を以て研究に従事し建築家も能ふ限りの援助と鞭撻を與へ以て圓滿な發達を期し、今後の建築には出来るだけ日本のエレベーターを使用したものである。

其他の材料

セメント。テラコッタ。リノリウム。ガラス等につきても成る可く國産品を用ひ、好んで外國製品を用ふるごとき方針は避けられたきものである但し同時に製造家に於ては特に此際緊渾一番研究に努力せられ、外國製品と比較して遜色なき品を提出あらんことを切望する。

結論

今や我國は經濟的に非常な危機に立つて居るのであつて當局は速かに經濟思想の普及を計り、積極的には金輸の解禁と物價の引き下げを敢行し暴利取締を嚴にし殖産工業の發達を助成し、又消極的には舉國一致虚榮を去り、建築界に於ては特に材料の國産化を斷行し以て我國經濟界の復活と國力の充實を計り、併せて建築界の健全なる進展を希ふ次第である。(一九二四、三、二九)

藪を廻れば

又水車あり

花 菜 村

使用者側より觀たる現時の建築

神戸高等工業學校長

廣 田 精 一

(一)

建築技術若くは建築學に對する門外漢であるからさて、對建築の批判を控へるといふことは、建築が我等社會人として又個人としての生活の一部である限り、まさしく、自己の生活に對して餘りに盲目であり無權威である。建築に對して素人であるからさて、事實我等の生活は一日たりとも建築そのものに交渉を有たないことはない。即ち、建築家の拵へた建物の中に呼息し、建物の裡に行動してゐるのであるから、我等は、建築に對して、自然に種々な要求と様々な批判が起つて来る。されば、一應は門外漢たる私も、日本現時の建築に對して、無遠慮に二三の事を申してみたい。建築家諸士が、私の斯る考から出發した斯の註文を寛大な心で受け入れて參考にして下さるならば、甚だ幸である。

(二)

私の觀た所では、近來日本に於ける諸種の建築は、凡てに於て長足なる一大進歩を遂げ來つたようであるが、就中、その著しいものゝ一つを挙げれば、先づ、その意匠に於て非常に注目を惹いてゐる。斯る現象は、等しく同架されてゐる處の他の工學には、今の處で到底見當らない現象である。それには勿論種々多様な關係をもつてゐることであらうが、建築設計圖案の懸賞募集などを屢々行はれることにも基るであらう。斯の點に於ては、機械工學や電氣工學などの、發明募集を偶々行ふのと、同巧異曲のよ

うであるが、後者の極めて獨創的なものに對して、前者は綜成的とも云ひ得ようか、何しろ意匠といふことに、綜合的な創成を産むのだから、そこに比較上難局はあつても、兎に角、斯る關係から意匠に於て漸次に佳いものが産れて來るようである。試みに、之を二十年前の建築と、今日のそれと比べてみれば、霄壤の差あることは、恐らく奈何なる素人も氣附く所であらう。されど、他面に於ては、意匠に偏傾の遺憾を禁じ得ざるものがある。それは、一言にして盡さば、意匠が進むで、實用が遅れた、といふことである。再言すれば、餘りに繪畫化された結果は、それが、實生活に於ける妥當性を遙か後方に遺して、今尚ほすん／＼と健脚を續けてゐるかの觀がある。今その一例を採つてみると、外觀と意匠を佳くする爲に、窓の寸法を高さ八尺八寸、幅三尺に造られた場合がある。斯の場合、分銅の上げ下げ窓で二枚戸になるから、一枚の硝子戸は高さ四尺三寸五分になる。然るに、窓の下場は、床から上三尺の所にあるから、斯の上げ下げ窓を上に出ると、床から上七尺三寸五分になる。従つて、一旦び揚げたが最後、丈の低い日本人は勿論、普通の西洋人でも、造作なく手を伸ばして閉ぢると云ふ譯にゆかない。仍で、その都度、椅子に上つて靴の脱ぎ履に飛むだ手数を掛け、立派な椅子を踏臺に雇用するか、又は何か踏臺を持つて來て閉めなければならぬ。徒らに物臭ひ譯でなくとも、竟には物臭くなつて、窓は成るべく開けぬやうなになり、殆ど年中閉された儘となつて、一體、窓を單なる明り採りとするのならば、何故に工手間を掛けて開閉されるようにしたかを疑ひたくなる。斯る事實は、勿論いと小さい事ではあるが、餘りに意匠にばかり凝り過ぎて、實用を遺き忘れた一例ではあるまいか。

(三)

次には、小さい事ではあるが「ドア」の把手に就いても一例として同様の事を申したい。日本に西洋建築が出來て、「ドア」の白い窯き物の把ッ手を私が初めて握つたのは、なんでも私の小學校に通ふや

うになつた六つ七つの頃と覺えて居る。それ以來今日まで、ざつと五十年の間、「ドーア」の把手と昵近になつてゐるが、今以て「ドーア」の把手は直ぐに脱落したり、緩んだりして、其の完全なのが少いのには、まつたく、その粗造さに驚く。然るに、私の前に住むてゐた家は、デラランドと云ふ獨逸の建築家が建てたもので、器具なども皆獨逸から持て來たのであるが、其の「ドーア」の把手は、建築後十三年間の今に至るまでも、少しの緩みも來なければ、勿論脱落の危険もない。仍で、私は、日本の他の製品と同等な御多聞に漏れない處の斯る把手と、獨逸の堅牢なそれとの對照に、國民性の何かを象徴してはゐないだらうかと、斯の事實に興味を有つて、その構造を調べてみたが、日本の品と比較して、獨逸のには何等餘計な材料を使つてゐるでもなく、日本品と同一價格で出来るやうなものである。唯、茲に注意を惹いたことは、其の構造に就いて工夫を凝してあるばかりで、何年経つても緩みが來ないのであることが判つた。今試みに、日本品である「ドーア」の把手は何故に緩むか、といふことを調べて見ると、それは、まことに簡單なものである。即ち、螺旋が極めて短い、唯それだけなのである。若し斯の螺旋を十分に長くして、獨逸のそのやうに、突き抜ける位叮嚀に鑽んで置かば、矢張り獨逸品同様に何年経つても、緩まぬ譯である。斯る事實も亦極めて些細なことであるが、斯の一事を以てみても、日本人は如何に物事に不注意であるか、と云ふ日本人の缺陷を示す適例であつて、五十年間も経過し乍ら、少しも改良せられず、又建築家が是等の余物を指定するとき何故に螺旋の長さを仕様書に書かないか、といふことを懷ふて、私は齒痒いやうな心持がする。それと同時に、幾度大火に遇つても、防火的若くは耐火の建築の餘り顧られずして、焼いては建て、建てゝは焼くその無關心な心持を讀めぬでもない。

(四)

尙ほ、少々尾籠な話ながら、而も頗る大切な事であるから、少し立入つて述べるが、それは、便所の

構造に就いてある。申すまでもなく、便所は汚水が跳ね飛ぶようでは、まことに不體裁である。仍で便器の高さと、其の横の仕切板とは、最も注意すべきものではあるまいか。然るに、有名な建築家の御設計になつた立派な「ステーション」や「ホテル」若くは「クラブ」杯の便所は、寔に當を得てゐないのが多い様に見受けられる。先づ、隔ての板から云ふと、地震の際に焼けたあの立派な新橋驛の便所は、「スレート」か何かで隔ての板が出来て居つたが、それに床の上僅に三尺五寸の高さしかない。だから、隣を覗き込むと、すつかり見える。何の爲に斯の隔てを拵けたか、頓と了解に苦む。是は、所謂眼隠しと云ふのであるから、眼の側になくはならぬ板である。即ち、人間の眼の高さは、概ね床の上二尺五寸から五尺五寸までの間にあるから、斯の眼隠しは、高さ二尺のもので三尺五寸から五尺位の間に取附けられて可い筈である。實際には、高さ一尺のもので、三尺五寸から四尺五寸の所に取附けて置くのが最も可いのである。それを床から三尺五寸まで取附けた杯は、寧ろその無用さに滑稽を感じられる。御設計になつた方にはお宥しを乞はねばならぬが、それが東京の表立關である新橋驛の新しい建築なのであるには、少々面喰はざるを得ない。更に、便器の高さであるが、是は普通床の上二尺二寸から、二尺五寸に取附くべきであるやうに思はれる。然るに、それを一尺五寸乃至二尺に取附けた所がある。其の爲に汚水が跳ね返つて至極迷惑する。こんな些細な注意を少しも考へずに、唯立派な窯き物や、美しい「エナメル」陶器乃至「フロステッド、グラス」を使ふことばかり考へるのは、矢張り外觀のみに捉れ、即ち意匠の精巧に偏傾して、實用を遺き忘れた結果だと思ふ。

註文序で、今一つ惡まれ口を申さむに、近頃用ひられてゐる「ブラインド」が満足に動いて居るのは、どちらかと云はゞ、少いと云つて可い。引ッ掛つたり、拗れたり、中には脱れて落ちたりして居るのが多い。是等も建築家の少しの御注意にて解決出来得る問題ではあるまいかと思ふ。

(五)

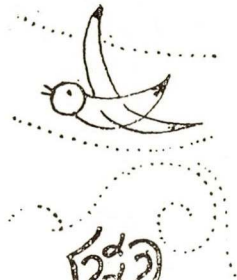
更に、重要な事は、雨仕舞である。私は、曾て、東京府廳が、東京有數の大建築として出来上つた間もなく、忽ち雨漏りで大問題を惹き起したことを記憶して居る。其の後、帝展や、博覽會で、雨漏りの爲に貴重な繪畫を汚したり、陳列品を損めて問題になつたこともある。併し、博覽會は假建築だから止むを得ないとしても、東京府廳の如き永久建築の雨仕舞が出来ぬとあつては、建築家の責任を云爲されることの當然なるを思はざるを得ない。私は、十數回、自分の關係した家を建てたが、何時も心配するのは雨仕舞で、今度こそは大丈夫だ、と云つた後から忽ち雨漏りがする。實際、雨は意外の所から侵入して来る。雨は上から降るばかりでなく、横からも降り、下からも降ることは、建築家の先刻御承知の筈である。従つて、普通の考では一尺で濟むと思ふ所も、二尺乃至三尺敷き込んで置くことが必要だと思ふ。西洋では、普通に日本より雨が少い。劍橋の大學生などは、傘を有たぬのを自慢にして居る。實際に自分も、西洋に居つた間は殆むど傘無しで怎うにか間に合つた。所が、日本の雨は、所謂盆を覆すやうな雨で、到底傘無しで歩けるやうな優しいものでない。斯の點を稽へ、且又一時間七十五哩以上の大颶風が雨に混つて襲ひ來ることを考へて、建築上の實際に就き餘程周到な注意を要するところである。左もないと、折角立派な建築に汚點も出れば、腐りも出来る。是等の施工法に就いては、學校でも一通りの講義はあるが、生徒は兎角そんな事に興味を有たない。又、請負人の奈何によりては、此處らが一番手の抜き所であるが故に、餘程嚴重に施工監督を要する。左なくば、折角注意せぬと、粹と美と金とを鍾めた大建築も、竟に忽ち斯様な失態に陷るのである。

(六)

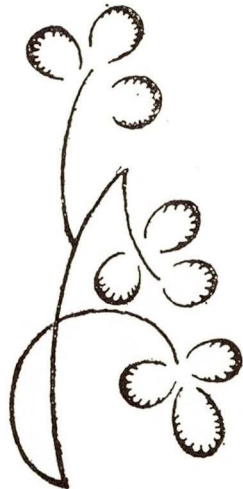
要するに、建築は、その觀照と實用に於て相並行し相伴ふべきことの當然であるから、今後、その意匠の方面に於て、増々それ々の創造を遂ぐると共に、勿論實用の方面にも創始的な產物を拵へることに建築家の努力を拂はれたい。斯くて、單に、以上述べたる缺點を補ふに止らず、更に進んで、日本は西洋と異ひ、非常に氣候の暖きことなども考慮に入れて、通風を良くする——言ひ換へれば、屋根から通風路を取るとか、種々さうした實用方面から考へて、住み好いやうに構造の革新も願ひたいものである（文責在記者——郊邨）

海を下る路を知る者は

河
に
隨
つ
て
往
く
べ
し



學子館



「コンクリートブロック」より「鉄筋コンクリートブロック」まで (四)

—附 中村式鉄筋「コンクリート」に就いて—

中 村

鎮

一 序 論

二 中空構造論(複構造論)

三 構造法の發達と互種類(綜合的構造法への道)

四 鉄筋「コンクリート」建築構造の得失

五 中空構造としての「コンクリートブロック」及び「ホロータイル」の發達

六 鉄筋「コンクリートブロック」(綜合的建築法)の出現

七 中村式「鉄筋コンクリートブロック」に就いて

鉄筋「コンクリート」ブロックに就て、私は數年來研究し又實驗した多少の意見を有つて居るので何等かの方法に於て、纏めて發表したいと思つて居た。嘗て雑誌「建築評論」や「建築世界」に其の一部を發表しかけたのであるが、途中から病氣になつて止めてしまつた。今此處に、十分に行かないけれ共、研究の概要を發表して見たいと思ふ。

六、鐵筋「コンクリート」・ブロック

ク「(綜合的建築法)の出現

茲に、鐵筋「コンクリート」・ブロック」と稱するものは、前章B、の二、に於て説明した様な、始めに「コンクリート」・ブロック」を以て假替代用に中空構造をなし其中に鐵筋を挿入し組立てたる上其中空を全部「コンクリート」にて充填して一種の合成構造に依る、單壁體を造る構造法の意味ではなく、「コンクリート」の中空構造の一部を割きて鐵筋「コンクリート」骨の爲の用に供するも、其大半は依然として中空のまゝ存在して、中空構造の理想を發揮し得るものを謂ふのである。既に前章の説明に於て要領を盡した如く、「コンクリート」・ブロック」(及びホロータイル)は強度の弱いと云ふ一缺點を除くならば其他に於ては殆ど理想的建築構造法たり得る事は明かであらう。處が其の缺點が只一點とは云へ最も重要視される強度の一點である事は、外の總ての良點を合せても尙ほ比敵し得ない惜しむ可き缺點である。殊に地震の災害

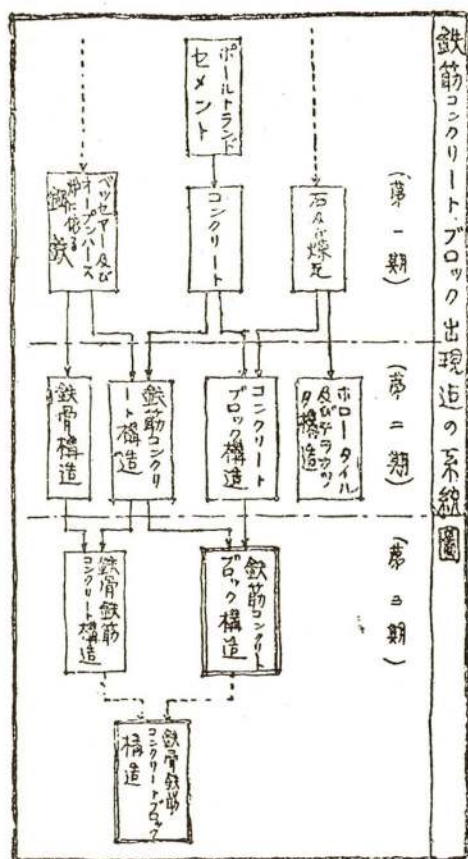
を十分に感じさせられる日本に於ては、其の一點あるが爲めに、他の幾の多優良點を持ち、理想に近しとせらるゝ「コンクリート」・ブロック」構造(複構造の理想を盡せるもの)は危険なる構造法として殆ど顧られない有様である。

又他力鐵筋「コンクリート」に依る建築法は強度の點に於て殆ど理想的であるが其他のものに於ては非常に缺點の多い事は、前に「鐵筋」コンクリート」建築構造法の得失」の章に於て詳しく論じた通りである。處が不思議な事には「鐵筋」コンクリート」の缺點は悉く「コンクリート」・ブロック」の特長であり、「コンクリート」・ブロック」の大缺點は鐵筋「コンクリート」の唯一の大特長である」と云ふ事である。別言すれば「鐵筋」コンクリート」は「コンクリート」・ブロック」は其の得失が全く相反するものである」と云ふ事である。

其處で吾々は當然の結果として慙う云ふ事に思ひ到るであらう。(一)「コンクリート」・ブロック」と鐵筋「コンクリート」とは共に「コンクリート」を基とする點に於て同族である。(二)然るに其特長

と缺點とは全く相反する。(三)若し兩者を結合せしめたならば、そして相互の缺點を他の特長に依つて補つたならば、共に其特長の方に於ては他に比敵す可き何物をも持たない兩者は、一體となる事に依て吾々が永い間望んで居た理想的構造法を完成するの道に進み得はすまいかと云ふ事であるこの自然の思索は非常に都合よく適中した。『恰

第 廿 三 圖



も嘗て張力の強い鐵を壓力には強いが張力に弱い「コンクリート」を結びつけて鐵筋「コンクリート」が考へられ、其が非常によい結果を得たが如く、強い鐵筋「コンクリート」と弱い「コンクリート、ブロック」との結び付けは非常なる成功を期待する事が出来る」と云ふ確信に迄到達したのである。

即ち疊に中空構造論と綜合的構造論に於て、今日の建築構造の理想とする點を述べて置いたが、其の理想が確實に實行の上に置かれて證明せられて居ると云ふ事は吾々建築家として非常に喜びでなければならぬ。次の表は即ち理想的建築構造法鐵筋「コンクリート、ブロック」に到る迄の建築構造法進化の系統である。(第二十三圖)

此の兩者が完全に結合した結果は實に次の如き完全さを得ら

れる點に於て敢て理想的であると云ひ得る。

(此の説明を簡單にする爲め以下暫く「エンクリート、ブロック」をAとし、鐵筋「コンクリート」をBと稱する事とする)

(一)耐火なる事

(A及びBの特長)

(二)耐久なる事

(A及びBの特長)

(三)耐震なる事

(Aの缺點Bの特長)

(四)防濕完全なる事

(Aの特長Bの缺點)

(五)保温(夏涼しく冬暖かし)完全なる事

(Aの特長Bの缺點)

(六)材料輕減(基礎輕減を含む)

(Aの特長Bの缺點)

(七)假枠に依る面倒削除

(Aの特長Bの缺點)

(八)施工迅速

(Aの特長Bの缺點)

(九)優格低廉

(Aの特長Bの缺點)

(十)外觀の優良

(Aの特長Bの缺點)

(十一)配管配線の便利

(Aの特長Bの缺點)

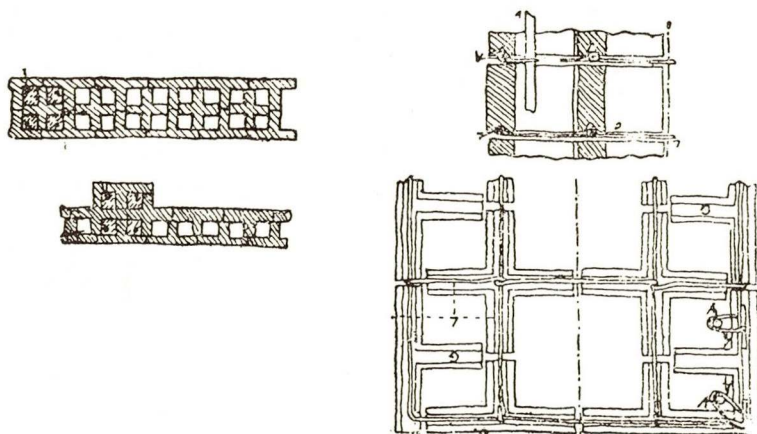
斯くして兩者の巧なる結合が上掲十一項の満足なる解決を得るゝとすれば他に求む可き重要な問題は先づあり得ないと思ふ。私が鐵筋「コンクリート、ブロック」構造法を以て、理想的の建築構造法と稱する所以のものは實に此所に存するのである。

恙う云うて來ると既に鐵筋「コンクリート、ブロック」構造は立派に出來上つて居る様に思はれるけれど、實は未ださうではなくて、ほんの一二歩を踏み出した丈けである。前にホロー、タイルの事を書いた時に米國の或「ホロー、タイル」の著書に「ホロー、タイルは實に明朝の建築法である」と書いてある事を述べて置いたが、この鐵筋「コンクリート、ブロック」建築構造法も實に來る可

き新しき日の建築法として生れ出たものであるその健全な發達のために實に優れた學術的達見を持てる新人のよき哺育に俟たな

鐵筋「タワロブト」リタンコ」筋鐵る依にせ合組のと形字十と形字T

第二十四圖



ければならない。

其の發達の上に於て最も難關とされる處は『如何にして「鐵筋」「コンクリート」及び「コンクリート」「ブロック」兩者の特長を少しも傷ける事なくして、其の兩者より完全に缺點を除去するか』と云ふ事になる。之を別言し詳言すれば『如何にして鐵筋「コンクリート」は其の強度を減する事なく寧ろ其理論的構造を在來の一般鐵筋「コンクリート」構造法よりも更に完全に發揮しつゝ、「コンクリート」「ブロック」を補強し、一方「コンクリート」「ブロック」は其の中空に依る幾多の特長（前掲）を少しも傷けられる事なくして、鐵筋「コンクリート」と結び付き、在來の假柱に依る構造法の幾多の缺點を完全に除去し得るか』と云ふ事である。

此の難關を越ゆる事が鐵筋「コンクリート」、ブロック」發達に對する唯一の道である。併し今日迄の處ではそれ等は甚だ完全に行つて居ない『僅に鐵筋「コンクリート」の理を應用して其弱さを半減された「コンクリート」「ブロック」構造』とでも

LIVERPOOL HOUSING SCHEME

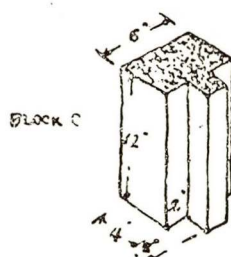
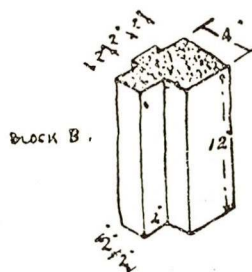
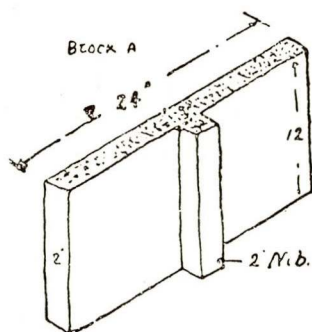
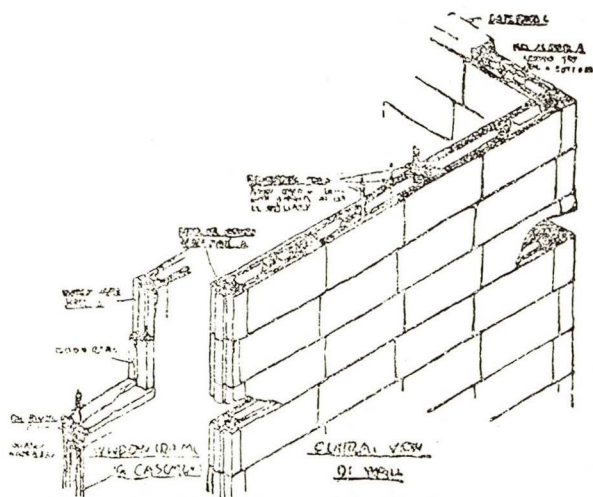


Fig. 2. Types of rivers used.



ECONOMIC SYSTEM OF WALDORF

稱す可き程度のもの許りである、併し何物か其初期に於て如斯からざるものがあらう。其出發點さへよければ、この事は研究者に却て力を與ふる處のものである。以下其の三四の例を擧げて、其の得失を批判する事とする。

第二十四圖は佛國の建築雜誌の新材料と云ふ研究の中に載せられて居たもので、T形と十字形とを組合せて中空を作り其横目地は内外共小鐵線を挿入し又、其要所には中空を利用して先に鐵筋を建て、次に「ブロック」を其廻りに積み立て、後に「コンクリート」を其の部丈け打込んだものである。(一) T形と十字形と二種の主要形を要する事は可也に不便であり、(二)更にT形も十字形も製作運搬共不便である。(三)それに鐵筋もまだ十分に理想の形には組立て得ない憾があるが、今日の幼稚な鐵筋「コンクリート」ブロック「中では可也に優れたものゝ一つである。

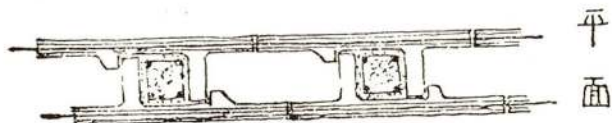
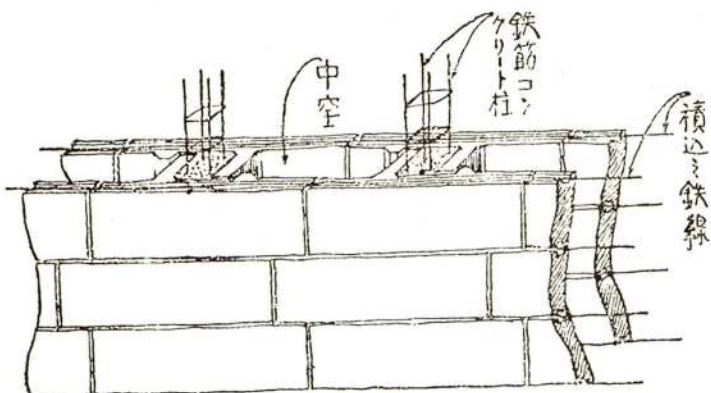
第二十五圖は一種のT形「ブロック」を用ひて是に二三の「ヤクモノ」を窓及隅角等に用ひつゝ壁體を完成する處の可成に進んだ「コンクリート」ブ

ロック」の構造法である。唯鐵筋「コンクリート」ブロック」としては未だ甚だ幼稚な域を脱して居ない。例數かと云ふと、其中空の所々に圖に示す通り、多少の鐵筋を配置し又一段毎に兩側に鐵線を置くとは云ふものゝ、其の「レインフォースメント」は僅に「コンクリート」ブロック」の弱さを助けて居る丈で、完全な「レインフォースメント」の理想を發揮して居るとは云へない。地震の少ない英國邊りでは住宅位のものに用ひて十分であらうが、日本に於ては住宅類でも未だ多少の危險を感じる位である。唯「ブロック」としての組合式に依る巧妙なる取扱ひは、可成に注意をするに足るものである。

第二十六圖はアムビー式と稱する獨逸の特許の方法である。F字形の頭の飛出した様な「ブロック」を圖の様に組合せて約二尺間位に鐵筋「コンクリート」柱を建て、行く方法である。之には隅角の所と窓側の所などに異形(ヤクモノ)を用ひてある。又た「ブロック」一段毎に内外に鐵線が積込める様になつて居る。又同様の方法で隅にも柱が

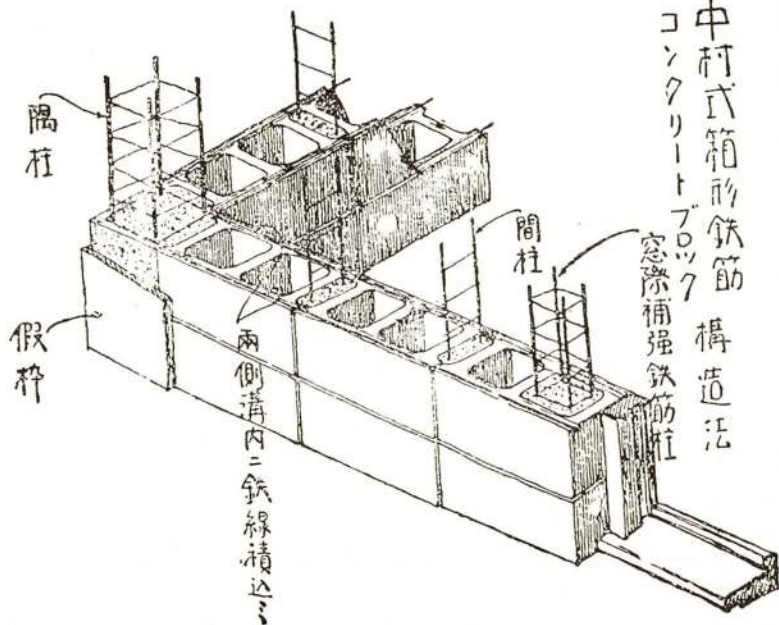
第二十六圖 アムビー式建築法
 アムビー式建築法と稱する箇所の特許権は、コンクリートブロック製造

アムビー式建築法



第二十七圖 實用新案中村式箱形鉄筋コンクリートブロック構造法

中村式箱形鉄筋構造法 コンクリートブロック 窓際補強鉄筋柱



設けられる様になつて居る。

非常に優れた方法とは思はないが小建築（低い三階位迄のもの）には適當な方法である。其巧妙な組合せ方と、其の鐵筋柱を小さいながら完全に組合せて「ブロック」柱に先立つて建て得る點などは、鐵筋「コンクリート」構造の大切な狙ひ所を誤つて居ない。只之が中建築及び大建築に用ひ得ないのは、其「スケルトン」を一定の大きさより擴大し得ないと云ふ點にある。之は單に此の式に限らず今日の程度では多くの鐵筋「コンクリート」、ブロック」の共通の缺點である。

第二十七圖は私が嘗て考案して新案特許を得て居るものである。（併し今では使つて居ない）圖示の通り二つの堅穴のある「ブロック」を辛積にし、其の横目地の處には溝を設けて内外二重に鐵線を入れ、又堅目地の處は目地の中が廣がつて間柱になる様になつて居る。隅角や其他必要な箇所には假杵を設けて鐵筋「コンクリート」柱が建つ様になつて居る。又窓際などには「ブロック」の中空内に小さい柱を建てる事になつて居る。更に「ブロッ

ク」一個の中には二本宛小鐵線が入つて居て幕壁に來る斜張力に對抗する様になつて居る。

今之に就て其得失を論ずると次の如くである。

（一）特長の方は補強が十分である事、即ち隅や必要の所の柱に加ふるに間柱が約尺五寸間に置かれ窓際等の開口の弱所は皆鐵筋にて補強せられて居る。其上横目地の内外に小鐵線があり、更に「ブロック」内に二本宛内外に都合四本の小鐵線を入れてある。之等は總て相依り相助けて斜張力に對抗するので、地震や颶風等の衝動に對して可也に強い事となり三四階位迄の建築に用ひ得るのである。又中空も約五〇%近く迄取れると云ふ點に於て可也に材料の節約をなし得る。（二）併し缺點として舉ぐ可き事も多少はある。「ブロック」が箱形である爲め形が大きくなつて製作施工に多少困難である事と設計に當つて石割の大きいために自由に驅使し得ないと云ふ箱形「ブロック」の一般的缺點がそれである。次に柱を完全に鐵筋「コンクリート」柱とする爲めには其部分是一部假杵の力を借りる必要がある事である。つまり恚うして來る

と半ば鐵筋「コンクリート」構造を助ける幕壁用「ブロック」の意味をしか出し得ない。併し只幕壁用のものとして考ふる時は他の如何なる方法（煉瓦中空煉瓦其他）よりも優秀である。

以上舉げた數種の例に依つて之等のものを通覽して見ると鐵筋「コンクリート」、ブロック構造が（一）一方柱梁等の結構式建築の形を用ひ（二）他方「ブロック」に依る積疊式建築法の流を汲みつゝ、其柱梁等は鐵筋「コンクリート」の鑄造式建築法を以て成し遂げて居る。つまり結構式、積疊式、鑄造式の三式の組合せに依る綜合的構造法への道を進みつゝある事を知るであらう。

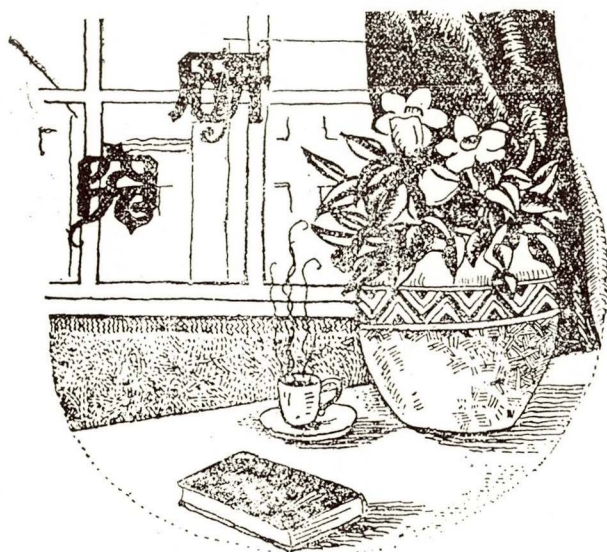
私が前章に於て論じた綜合的構造法は實に如斯

にして其の出發をなして居るのである。

中空構造論（複構造論）と綜合的構造論とは實に私が此の論文の最初に掲げた理想であつた。此の理想は鐵筋「コンクリート」、ブロックの出現に依つて正に實施の上に置かれたのである。私が鐵筋「コンクリート」、ブロック建築構造法の發達を冀望し之を力説する所以のものは實に此の理想的建築法の實現に向つての道を歩んで居るからである。私は次章に於て此の理想を今數歩確かな前方へ進んだと思ふ私の發明の鐵筋「コンクリート」、ブロック構造（I形に依るもの）に就て説き度いと思ふ。

さや く ささや く 青葉の

枝 見 つ く 沖 の 白 波 お も ひ に け り



各地に於ける震後の決定

以上の如く普通破壊的地震の震度は先づ三百より四千秒々耗位の間に於て起るもので震地に接近した局部的地方とか又は断崖の附近とかの外無暗に大きな地震が起るものではないから地球の一部

地震と耐震建築

(二)

無 漏 林 樹

が全く轉覆する様なことは無い譯である、従て今度の地震に際し米國が義捐金募集のため新聞に出した廣告の表題の

“The Earthquake has swallowed the Imperial Hotel,”といふ様なことは直に針小棒大の報告であ

ることが解る、我國に於ては既往の地震に依つて大體その震源地と主なる地震帶とは研究されて居るから各地に於ける地震の程度は想像することが出来る。

東京で普通大地震と考へられるものは山の手邊では最大加速度千から千五百秒々耗で下町の地盤の軟弱の所では二千から二千五百秒々耗位であらうと考へられる、故に山の手邊の建造物に對しては重力の一割から一割半の見當の横力に對する設計が必要であるし下町では重力の二割から二割半の横力に抵抗し得し得る構造が必要になる譯である。

勿論以上は大體の見當であつてその土地の狀況又は地盤の良否に依つてその震度を異にするものであるから一概に之を定めることは出来ない、假へば東京の九段や駿河臺邊は比較的地盤の好い所であるがその間に介在して居る小川町や神保町邊は餘り良好の地盤ではないのである。

又傳通院と本郷高臺との間にある田町附近に於いても同様のことが云へる即硬地盤の間にある軟

地盤は地震動を受けることが著しいことは實驗上確實のことになつて居る。

又この度の地震で鶴見川崎邊では川崎附近が一番被害の狀況が顯著であつた様に見えるが鶴見から生麥邊に於ては反つて震度が少なかつた様に見える、之は川崎附近は田圃の埋立地であるため鶴見邊は洪積層の赤赭の地盤であるためと考へられる。

大森博士は大正十一年十一月に將來の東京に起る可き地震の程度について一言して曰く『東京附近に於ける將來の地震で大きいものになると山の手邊では最大加速度千秒々耗位になり、煉瓦造の煙突は壊され家根の瓦は落されるものがある。下町邊では最大加速度二千秒々耗になり、煉瓦造家屋には全潰するものがあり其上土藏の壁は剝落するであらう』と

先年九月の大地震は之より少し大きいものであつた。

又同博士の説に依ると大阪地方に於ける今後の大地震の程度は殆んど東京と同一であるといふこ

とであるから、天王寺方面の洪積層の地盤に於ては最大加速度一千秒々耗即重力の一割位の地震が、又北部及西部築港方面の低地沖積層の軟地盤に於ては最大加速度二千秒々耗、即重力の二割位の地震が来るものと考へられると云ふのである、即今度の關東地方の地震に似た程度の大地震が關西にもあり得るといふのである。

大阪市内の地質の大體を述べて見ると天王寺方面の臺地に於ては第三紀層の硬質地盤の上に洪積層が三十尺盛られて居る、この附近の洪積層は先づ赤土が十尺から十五尺位まであり、それから帶青灰色又は黄褐色の粘土が二尺位から六尺位の深さにありその下は砂礫交りの砂層が十尺から十尺位占めて居る、この砂層は非常に堅い地盤で建築物の基礎をこの地盤まで掘り下げさへすれば、基礎工事は特別に手當をする必要がないのである、所が普通の建築物の基礎は丁度地面から十二三尺位にある。第一粘土層に來る都合になるので具合が悪いが出來ることなら基礎を少しく深くして此次の砂礫層に置くか、又は、基礎掘方の粘土を二

尺或は三尺掘り下けてこの砂礫層を表はし、栗石又は砂礫にて搗き堅める必要があるのである。

次に低地の沖積層は上層の六十尺位は極めて軟弱の青黑色の粘土で、その下から砂になり、砂利になつて居るのであるから前述の洪積層より悪いことは明かである。

重量の重い建築や、高層建築を建てる場合はこの砂層又は砂礫層まで基礎を入れなければ甚だ危険である、之がためにベドスタルバールの四五十尺の長いものを用ひてこの砂礫層に球根を置いて居る箇様に地盤に依つて基礎工事の難易を來すものであるから、建築物の設定敷地の撰定如何は工費豫算に重大なる増減を來すものである、私は先日、都島某工業學校の基礎工事と阿倍野臺某病院の夫れを見て、殊にこの感を深くすると共に大阪市に於ける基礎工事の難易の好適例であると思つた。

今誠に大阪の地圖を擴けて見ると、その主要部はこの低地の沖積層又は埋立地を占めて居ることに氣が付くであらう、而して高層建築、大建造物

は皆この中に建てられて居るのであるから地震に逢遇しては危険率が多い譯である、單にその地盤が良好でないのみならず、建物の配列状態耐火耐震家屋の率或は公園の數、廣さ、交通の便否、梁橋の材料等皆地震火事の場合極めて不都合の状況に在るのであるから喩へその震度に於て此の度の關東の地震より少し位小さいものであるにしても之が實際に大阪を見舞た場合を想像して見るとその被害程度は恐らく東京に於けるものより慘憺たるものがあるだろう、この點に關しては夙に學者初め當局者の認むる所となり、各方面に於て盛に輿論を喚起して居るが一日も早く之等不備の點が改善されることを待つものである。

故大森博士がその病床中に於ける嘆語の一節に「關西の人々に是非一言云つて置きたい事がある」と云ふ様なことがあつたと聞いて居るが臆測するに博士が常に今後大阪地方に來襲すると考へられる地震の程度と被害の程度について懸念せられ今のうちに之に對する設備を完全にして置かないと後に悔ゆる所があるぞと云ふ様なことではないか

と思はれる、今もし之がその心を讀んだものとすゝるならば博士の地震學に對する献身的努力に對してもその意のある所に從ひ改良設備をしなくてはならない。

即、道路の擴張、公園の設置、又は擴張、主要街路を擴張して道路公園を設けること、建築物の整理、地域の整理、防火地區の設定、橋梁の改善交通機關の完備、庭園を各自に備へること等は地震や火事の災害に對する設備として最も急を要するものであるが、之等は又都市として必要缺ぐ可らざる要素である、大阪が今日の如き窮狀に陥るまで放棄してあつたことは寧ろ不思議のことである、この土地に生れ育つた人は大阪の都市に自然同化されて何とも思はぬであらうが、既に世界的都市となつた以上今日の如き状態を維持して居るのは實に日本都市の恥辱である。

次に濃尾地方及信濃川流域地方も地震帶とされて居るがこの歴史的大地震を掲げると前者に於ては明治二十四年十月の濃尾大地震、後者に於ては弘化四年三月の善光寺地震である、兩者ともその

最大加速度は名古屋市及長野市に於て二千秒々耗位であつたものと想像されて居るから今後もし大地震がこの附近にあるにしてもこの程度を越すものとは思はれない。

以上は本州に於ける主なる地震の震度であるが九州や北海道、臺灣等も夫々相當大きな地震がある場所とされて居る。大森博士の説に依ると九州や北海道は主として火山性の地震であるから、喩へ大地震があつても一小部分に限られるものであるが臺灣に於ては最大加速度二千秒々耗の地震があり得るものとされて居る、朝鮮の大地震と云ふのは今までの所最大加速度五百秒々耗が最大とされて居るから先づこの位の震度が止りであらうと考へられる、従て震災の杞憂に關しては本州に於けるよりは朝鮮の方が安全である、一體に朝鮮、滿洲から支那大陸にかけては地震の廻數や震度は漸次減少して居るのである。

夫れで先づ我國六大都市に於ては地震の最大加速度を大體二千秒々耗と豫想して總ての建造物は之に堪え得る程度のものでなくてはならない事に

なる。即少くとも建造物自身の重量の二割の横力に堪え得るものが必要である、大阪府に於て今般認められて居た最小震度は重力の一割であつたが最近聞く所に依ると、今後二割の震度を最小限度とすると云ふことであるが左もある可きことであると思ふ。

他の都市に於ても之に準じてその地方の既往の地震の震度に鑑み、その震度を適當に撰定し、各府縣に於て法令を以て之を實施せしむ可きである

建築物の自己振動

自己振動周期と剛應の程度

震度を決定して之に抗し得る建築物の各部材を算定し之を適當に組合せ之に肉をつけて一つの建築物が出来上つた場合之が全體として果して豫定した震度に對して安全であるか、又は軟弱であるか剛強であるかといふことは計算のみでは之を判然せしむることは出来ない、各部材の繼手の手法や材料の種類、又は使用方法等に依つて異なるものであると云つて之等の建築物に絶大の横力を加へて

破壊試験を行て見ることも不可能の話である、そこで一つの建物が出来上つた場合にその剛強の程度を實際に知る方法が必要になつて来る。

大森博士は建造物の剛強の度合はその建造物の自己振動の振幅の大小及週期の長短と密接の關係があることを論じて居る。

一般に建造物の剛強のもの程、自己振動の振幅及週期は小さく軟弱のもの程之が大きき、日本建築の特殊のもの例へば五重の塔の如きは、反て自己振動を利用するものであるが、現今の構造法に於ける鐵骨構造や鐵筋コンクリート構造に於てはその繼手が剛一體になつて居る譯であるから、自己振動の小さいもの程剛強の度を示めすことになる、然し鐵筋コンクリート構造に於ては、その自己振動の小さいものでもコンクリートの彈性係數が小さいため、地震に振られるとその初めに於て無數の微細の裂罅を生じて忽ち、軟弱のものになつてしまひ、其夥しい重量のために大破壊を來す様になるものもあるから鐵筋コンクリート構造に於ては初めよりその自己振動の非常に小さいもの

を造らなければならない、そのためには鐵筋を合理的に配置するは勿論、各鐵筋は互に縛りつけ、鐵筋のみにても既に相當の強さの架構とならなければならぬ、ある特種の外國製輕便鐵筋は各材が、少しも連結されて居ないものであるが、之等は大建築物の主要なる構造部には用ひられない。是の如き鐵筋を使用した鐵筋コンクリート構造に於て初めの震動で無數の小龜裂が生じるとコンクリートとはその應力を發揮する事が出来なくなるし、鐵筋との附着力も減少して來てその最も弱い部分が一寸でも潰れ初めると夫れを動機に、ごし／＼潰れ初めて全潰しなければ止まるものではない。(つゞく)



混凝土施工能率の鐵筋混凝土結構の強度に及ぼす影響

八 木 幸 次 郎

序 論

鐵筋混凝土構造は、其主たる材料が混凝土の如き、著しく施工方法の良否により、素質に影響を受け易きものによつて成るから、假令結果に於いて一見均等なる混凝土の一體を成してゐるとは謂へ、各部材の混凝土は必ずしも一定の強度も有するものとは思はれない。

例へば柱の如きは必ず梁下端の位置に於いて、打繼を行はなければ完全に施工が出来ず、梁の如きも一日の工程により已むを得ず打繼を生ずることあり、施工中降雨雪又はエレベータ或はミキサの故障等により、大切な箇所を打繼しなければならなくなることもある。假令不完全のため所謂

豆板を生じたり、突方不充分のため空隙を生じたり、假令保存期間の不足や取脱方の粗雑其他色々な施工上の缺點又は缺陷により混凝土の素質の低下を生ずることは免れない。更にセメントの調合の多寡、品質の不良に至つては最も接密に混凝土の素質の低下を生ずる原因となるものである。斯様に考へて來ると逆も一通の強度計算を信用して鐵筋混凝土構造の設計及び施工を行ふことが出来なくなる様になる。

扱て混凝土の素質の低下を如何様にして測定するかといふことになるが、逆も容易に解決することが出来ない至難の業である。強ひて測定せんとするならば、一々出来上つた混凝土を實驗室に運んで、彈性率を一々測定するより外手段はないやうに思はれる。

混凝土の彈性率 E といふものは、大體每平方吋 300000 封度であつて、鐵筋の彈性率の十五分の一であると云ふことは、強度計算に於ける一つの假定であるが、

出來上つた混凝土が果して如何何程の彈性率を有してゐるか云ふことはわからぬものであるが、素質惡しき混凝土の彈性率は、良きものゝ彈性率より値が小であると云ふことは、容易に推測し得る事實である。故に本文に於ては結構各部材の混凝土の彈性率の多少が、如何様に結構の強度に影響を及すかといふことを、數字を以て説明することが本來の目的なり使命なりと考へられるものである。

而して結構の部材といふものは柱又は梁であるから、柱及梁の混凝土の彈性率が各相異つてゐる場合には、異らざる場合と比較して如何様に變つた結果を生ずるか云ふことが問題となつて來る又結構の強度に最も深き關係あるものは、何と云つても各部材に生ずる曲能率であるから、結局結構各部材の混凝土の彈性率の變化による曲能率の

變化を、數字を以て説明することが即ち本文の目的となつてしまふ譯である。

本 論

1 符 號

E = 混凝土の彈性率

h = 階高

I = 斷面 = 次率

K = 各部材の剛度 = $\frac{\text{斷面} \times \text{次率}}{\text{長サ}}$

l = 張間

M = 曲能率

P = 橫力

w = 一尺當りの等布荷重

β = 梁の剛度と柱の剛度との比 = $\frac{K_B}{K_C}$

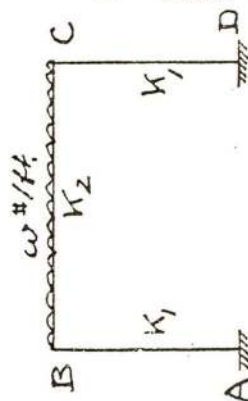
$+M$ = 時計の針と同方向に働く曲能率

$-M$ = 時計の針と反對の方向に働く曲能率

2 — 張間單層の結構

(1) 垂直荷重(對稱等布荷重)を受けたる場合

a. 各部材の混凝土の弾性率一様なる場合



$$\frac{K_2}{K_1} = \beta \quad \text{とす}$$

$$M_{AB} = \frac{wl^2}{12(2+\beta)}$$

$$M_{BA} = 2M_{AB}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

$$M_{\text{梁中央}} = \frac{(1+1.5\beta)wl^2}{12(2+\beta)}$$

b. 梁の混凝土の素質低下せる場合

E_2 = 梁の混凝土の弾性率

E_1 = 柱の混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1}$$

$$M_{AB} = \frac{wl^2}{12(2+\phi\beta)}$$

$$M_{BA} = 2M_{AB}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

$$M_{\text{梁中央}} = \frac{(1+1.5\phi\beta)wl^2}{12(2+\phi\beta)}$$

c. 柱の混凝土の素質低下せる場合

E_2 = 梁の混凝土の弾性率

E_1 = 柱の混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1}$$

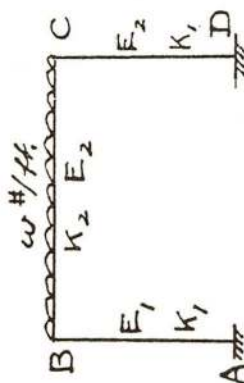
$$M_{AB} = \frac{wl^2}{12(2+\phi\beta)}$$

$$M_{BA} = M_{AB}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

$$M_{\text{梁中央}} = \frac{(1+1.5\phi\beta)wl^2}{12(2+\phi\beta)}$$

但し ϕ は以上の数となる。



d. 一方の柱の混凝土の素質低下せる場合

E_2 = 混凝土の弾性率

E_1 = 素質低下せる一方の柱の混凝土の弾性率

$$\phi = \frac{E_2}{E_1}$$

$$M_{AB} = \frac{1-3\beta+9\phi\beta}{12(2+2\beta+11\phi\beta+6\phi\beta^2)}wl^2$$

$$M_{BA} = \frac{(2+3\beta+9\phi\beta)wl^2}{12(2+2\beta+11\phi\beta+6\phi\beta^2)}$$

$$M_{BC} = -M_{BA}$$

$$M_{CB} = \frac{2(1+6\phi\beta)wl^2}{12(2+2\beta+11\phi\beta+6\phi\beta^2)}$$

$$M_{CD} = -M_{CB}$$

$$M_{CD} = \frac{1}{2}M_{CB}$$

$$\Delta = \frac{(12+15\beta+63\phi\beta+36\phi\beta^2)wl}{12(2+2\beta+11\phi\beta+6\phi\beta^2)}$$

$$M_{\text{梁中央部}} = \frac{\Delta^2}{wl^2} - \frac{(2+3\beta+9\phi\beta)wl^2}{12(2+2\beta+11\phi\beta+6\phi\beta^2)}$$

但し ϕ は1より大なる数である。

扱て以上の結果を綜合して考へれば次の如きものとなる。

剛比 β を1及0.5及0.1の場合にて、混凝土の弾性率の低下を八割及五割と考へれば表に示すが如き結果となる。

	曲 能 率	$\beta=1$		$\beta=0.5$		$\beta=0.1$	
a. の 場 合	M_{AB}	$0.333 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.400 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.476 \times \frac{wl^2}{12}$	
	M_{BA}	$0.666 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.800 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.952 \times \frac{wl^2}{12}$	
	M_{BC}	$-M_{BA}$		同・左		同 左	
	$M_{\text{梁中央}}$	$0.833 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.700 \times \frac{wl^2}{12}$		$0.548 \times \frac{wl^2}{12}$	
		$\phi=0.8$	$\phi=0.5$	$\phi=0.8$	$\phi=0.5$	$\phi=0.8$	$\phi=0.5$

b. の 場 合	M_{AB}	$0.357 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.400 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.417 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.444 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.480 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.488 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$
	M_{BA}	$0.714 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.800 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.834 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.888 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.960 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.976 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$
	M_{BC}	$-M_{BA}$	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左
	$M_{\text{梁中央}}$	$0.784 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.700 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.666 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.611 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.540 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.524 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$
		$\phi=1.25$	$\phi=2$	$\phi=1.25$	$\phi=2$	$\phi=1.25$	$\phi=2$
	M_{AB}	$0.307 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.250 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.381 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.333 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.471 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.454 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$
	M_{BA}	$0.615 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.500 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.762 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.666 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.941 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.908 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$
	M_{BC}	$-M_{BA}$	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左
	$M_{\text{梁中央}}$	$0.885 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$1.000 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.738 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.833 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.506 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$	$0.636 \times \frac{\tau \omega l^2}{12}$

d. 例 場 合

	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$	$\phi = 1.25$	$\phi = 2$
M_{AB}	$0.366 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.421 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.436 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.500 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.500 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.553 \times \frac{wl^2}{12}$
M_{BA}	$0.611 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.605 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.776 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.736 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.939 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.909 \times \frac{wl^2}{12}$
M_{BC}	$-M_{BA}$	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左
M_{CB}	$0.673 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.684 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.800 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.824 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.966 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.974 \times \frac{wl^2}{12}$
M_{CD}	$-M_{CB}$	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左
M_{DC}	$\frac{1}{2}M_{CB}$	同 左	同 左	同 左	同 左	同 左
$M_{\text{梁中央部}}$	$0.845 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.856 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.707 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.721 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.555 \times \frac{wl^2}{12}$	$0.558 \times \frac{wl^2}{12}$

表にて知らるゝ如く梁の混凝土の素質低下せる時は、柱に大なる曲能率を生じ、又柱の混凝土の素質低下する時は梁に大なる曲能率を生ずること

となる。即ち施工不充分のために部材の一部に缺點を生ずるときは、他の缺點なき部材がその責を負ふて缺點を補ふことになる。これが結構の妙味

でもあり又特長ともなるもので、一般に抵抗力大なる部材には抵抗力小なる部材よりも大なる曲能率を生ずるものである。畢竟の場合にて得たる結

果によりて決定せられたる餘裕なき断面には、施工上一割五分内外の超過應力を生ずることは計算者の常に覺悟して置かねばならぬことである。

(未完)

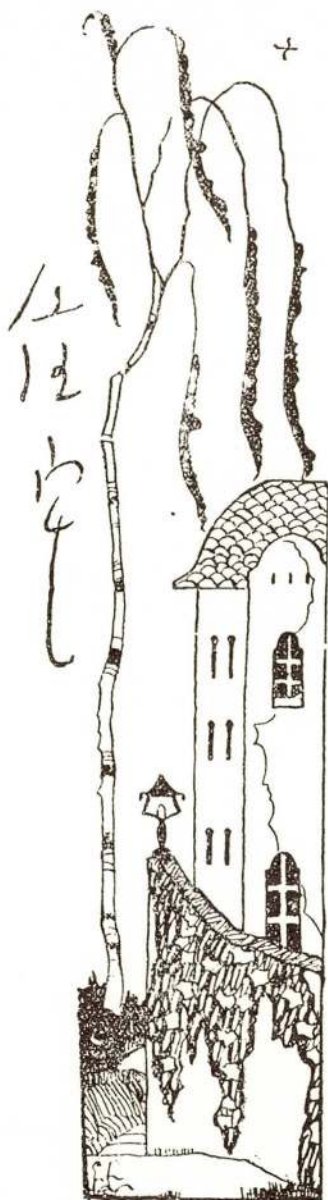
榮
の
花
や
重
た
き
足
の
土
埃

□

榮
の
花
や
千
松
に
つ
く
沼
を
前

住宅のもつ雰圍氣に就いて

安野 二位 夢



或る特殊の目的のために造作られた部室を、すぐ住宅と呼ぶことができないやうに、勿論、單なる小部室の連續或は聯合を、そのまゝ住宅であると言ふことは能きませぬ。多くの小部室の集團であり乍ら、決して住宅でないものもある。唯一部室で完全な住宅としての條件を充分満足させてくれるやうな部室も最近時々見かけます。定義などと言ふものは畢竟定義に過ぎないのですからごうでもいいのですが、住宅を安易に定義づければ、

各々或る特殊の目的を有つた種類の異つた部室のいくつかが或る一つの趣味理想ごでも言ふべきものに依つて適當に整調され、俱に或る一つのまごまつた構造の美を創生するものを住宅を言ふのでありませう。ですから、唯一部室であつても、その部室があらゆる生活上の種々なる目的に完全に合目的でさへあれば、此の一部室を立派な住宅とみなしていいでありませう。書齋と居間と應接室とが一部室で兼用される場合、炊事場が食事室を

兼備してゐる場合等は、通常の家庭にはありがちなことゝして宥され或は稱揚されてあります。が正しき場合は、書齋は書齋として、寢室は寢室として、それぞれ一定の特種な目的を有つてゐるべき筈のものでありますから、住宅とは簡單に言つて二つ以上の部室の統一體の謂であります。ですから、或る一つの住宅の有つ雰圍氣は、當然、各々の部室のもつ雰圍氣の總體である筈です。丁度それは或る管絃樂の有つ特種な雰圍氣に似てをります。一言で言へば、住宅の背景はその居住者の趣味性であります。その雰圍氣はその居住者の人格の雰圍氣であります。住宅の住宅としての理想は、造られたる住宅ではなく、生れたる住宅にあるべきであります。人に結びつかない住宅は、眞實の意味に於いて、住宅と呼ぶことはできないであります。

住宅をその量に於いて能き得る限り縮少し、その質に於いて充分なる満足を得やうとする風調は世界に於ける今日の一般の傾向であります。兼用されていゝ部室は巧みに兼用し、不要な部室は全

て廢し、如何にもして建坪を少くし、曾て忘れられたる庭園を住宅の一部とみてその坪數の増加を計り全らゆる建築上の勞費を避けて住宅本來の實に就かうとするのが最近の傾向となりつゝあります。従つて、居間にして炊事場を兼ね、應接室にして寢室を兼備された部室も、最近に於いては決して不自然ではなくなりつゝあります。が、今こゝには便宜上各部室々々に於いての雰圍氣に就いて書きたくおもひます。

極くありふれた例ではありますが、第一に、居間はやはり住宅の心臓である位置にあります。居間は、一言で言へば、居住者全てのなごやかな團樂の部室で明るく愉快なる會話の部室、共鳴と同情との部室であるべき筈であります。そこには居住者全ての人格の他意なき表現と觸合とがあります。居間に於いて第一に看取されるのはその居住者の人格の掩ふべからざる投影であります。居間の空氣はその居住者の教養の度合に依つて變るでせう。従つて、そこには充分に周到な考慮が拂はれなければなりません。全らゆる設備、一切の

意匠に於いて、能ふ限りの善美が表現され具象化されなければならぬわけでありませう。眞の意味での善美は、決して、單に表面のみに盛りあげられた輕浮な裝飾の謂ではありませぬ。簡素、清純高雅、明快等は何よりも先づこゝに求められなければならないものでありませう。豊かな趣味性に生きた健全なる家具の配置の美しさ、調和して深味ある窓、壁掛、床等の優れたる意匠は、居間を一層完全に個性づけるでありませう。ですから、今即座に在來の濡ひである趣味性を無視して所謂疊敷を輕蔑し、或は日本在來の家具を輕蔑する事に慣れてもなりませぬ。心持脚の低い安樂椅子のあののびのびした安易さこそ等しく、新しい疊の一種深い親しのさのある青き色調、或は木床ならぬ疊敷の上に敷かれた織布の柔かき感觸等も或は私達にとつては即座に棄て難いものでありませう。要は人格の正しき充分なる表現です。居間を居間として充分にまで生かし得るのは、建築者の技巧ではなく、居住者の人格でありませう。

書齋のない小住宅はあつても、炊事場のない如

何なる小住宅もありませぬ。極論すれば、居間のない住宅はあつても、炊事場のない住宅は事實に於いてあり得ませぬ。炊事場の住宅に於ける位置に就いては今更らこゝに書く要もない程であります。やかましい近代の住宅問題も先づその端をその炊事場の改造問題に發したと言つても過言ではないであります。住宅問題の一切は炊事場改造問題を外に置いて解決され得べくもありませぬ。或る社會學者は全らゆる社會問題をおしなべて胃の問題だと定義してをります。かう言へば幾分詭辯にはなりますが、或る意味に於いて、完全なる生活は完全なる炊事場を搖籃として出發します。少くとも、家庭の所謂情味はその家庭の炊事場の情味を根底とするところが多いやうに思はれます。そこは唯單なる經濟と營養とのみの世界ではありませぬ。生活に對する愛と理解とが、多くの場合こゝに芽生たる事實を拒むことはできないであります。求むるところは、第一に、充分なる衛生上の効果であります。完備したる採光、通風、保温等の施設、簡易、秩序、清潔等の具象的表現とし

ての食器戸棚、料理臺、流塲、爐等の美しき配置等、或は家具と家具とのさゝやかなる間隔の如きものに於いても、こゝに充分なる條件の満足が求められなければならないであらう。美しき住宅とはその装飾の華美なる贅住宅の謂ではありませぬ。殊に炊事場に於いては、その全らゆる設計と企圖とが充分實蹟をあげ得るやうに、實際の上に確く立脚されてゐなければならないわけです。完全なる炊事場の作る正しき雰圍氣は、丁度、充分健康なる青年の與へる明快な感じに似てをります。

ヅエルハアレンの「觸手ある都會」には厭くまで慘虐なる近代都市に食はれゆくうらさびれた田園の悲哀が歌はれてありますが、恣に住宅に食はれゆく庭園は近代の惡傾向であります。庭園は、決して、住宅に附從したあつてもなくとも大差のないものではなく、なくてはならぬ住宅の重要な一面であります。庭園を忘れて住宅を云々するのは、田園を忘れて都市を論ずると同じ愚かさであります。庭園は所謂必要以外の必要品ではあ

りませぬ。住宅として事務の施設だけあつて休養の設備のないのは、健全なる住宅と呼ぶことはできません。近代の都市居住者の悲哀は、第一に、森林や田園とその交渉を絶たれてしまつたところにあります。私達の魂はなんと言つても青い草木のうちにその靜かな安住を見出します。従つて、庭園は單に住宅の背景でのみありません。そこは住宅の全ての感覺の世界であります。私達の生命の表現、生活の叙情詩はこゝにこそ得られます。庭園の無視は自らの情操を無視することです。詩想の一切は美はしい戸外から來ると歌つた詩人は偽つてはをりませぬ。そこに私達は美しい草花の種子を播くと俱に溫い人情の芽を育みます。私達の情操の眞美と人格の高雅とはこゝからこゝ來るのであります。あののびやかな雰圍氣、おちつきある感觸は、私達の生活の母胎であります。春は春の艶やかな情調、秋は秋の豊かな興趣がここに見出せます。藤棚の一つ葡萄棚の一つ、或は花壇の數坪をその住宅に求めやうとするのも、決して、將來の生活には贅澤ではないであらう。

住宅の理想としては、庭園を附従させた住宅ではなく、庭園の中に建てられた住宅をこそ求めらるべきであります。

居間と炊事場と庭園と、之らのものは如何なる輕便な小住宅にも必ず用意されなければならない重要なものでありますが、他に獨立してをればそれに越したことはないのですが、都合に依つては兼用して充分兼用さるべき數多の部室があります。巧な兼用は時として單用の隨ち易い無趣味と單調とを充分おぎなつてくれるものです。近代の生活様式の種々相は日夜に繁錯に更新されてゆきつゝありますから、全らゆる點から言つても、獨立した特種の十個の部室よりも、巧な兼用の選ばれた五室の方が、所謂文化的な能率もよりよくあがりますし、その生活をも或點うるほひのある豊かなものとするのは事實であります。二室を合はせて一室とすること、或はその反對の場合等は、かうした場合の普通な例です。衝立、カーテン等の適當な使用がかうした時に重大な効果をおさめるであります。こゝにあるべきは統一の秩序との

美しさであります。全綜合の重い落ち着きであります。交錯した線と光との複雑化された輝やける生活であります。周到に設計されたる稍々細長き廣き部室、充分選擇されて要領を得た家具の適當な配置等は、専用の愉快を充分兼用の愉快に轉換させるに役立つであります。重複を避け、不必要を廢し、複雑を選ばないことは、やがて實際の要求に立脚した眞の住宅の高き目的に一致するであります。住宅の標準は畢竟人格の簡潔明晰なる表現にあります。從て、居間はまた書齋、應接室、寢室、或は食事室等に兼用されることができます。書棚、箆笥、納戸、或は書棚の裏に食器戸棚等が當然手際よく設備されなければならないのであります。或は晝間の安樂椅子を夜間は寢臺にする爲の工風、或は家庭的な小集會等の部室とするための戸外へ向つての廣い窓、一枚の扉を排してヴェランダへ出ら施設等、その各々の要求に應じて充分なる設備が要るであります。炊事場にしましても、その考慮と設備との如何に依りましては、食事室、洗濯場、浴室、化粧室等に充分兼

用することが能きるでせう。當然の便宜上から言ひまして、食事室と炊事場とはカアテンで區分された一部分である方が都合がいゝらしく考へられます。洗濯場、浴室等もその實驗上一部室である方がより能率的でありませう。また庭園には能きますなら、その趣味に應じて溫室、花壇、兒童の遊戲場等を設備するべきであるませう。私はヴェランダをも戸外の部室として庭園の一部分と見做したいのでありますが、こゝは初夏晩春の頃から晩秋の候へかけての喫茶室ともなり食事室ともなり得ます。一言で言へば、兼用の眞面目はその各部室の設備が互に扶助しあつて、相互の雰圍氣を亂し傷けず、その各箇の機能を充分に發現すべきところにあります。要は複雑の聰明なる統一、情趣と情調との美しき融合でありませう。

ですから、住宅の雰圍氣とは結局各部室の優れる情調の總和の謂であります。部室は有機的に住宅を組成します。部室は一部室として獨立することは能きませぬ。或る部室ゆ情調の破れは住宅の情調を破ります。一部室雨漏りすれば、その住

宅は雨漏りする家と呼ばれます。亂れた炊事場はその家庭の亂れを現はします。不快な應接室はその家庭への不快さを印象づけます。一樂器の破調は大きい管絃樂總體の破調となります。従つて、住宅の完成は決して一部室の裝飾的完成ではありません、こゝに言ふ雰圍氣とは住宅の空漠なる概念や曖昧なる裝飾の謂ではありません。住宅の雰圍氣はその居住者の人格の香氣であります。雰圍氣の亂れた住宅を健全なる住宅と呼ぶことはまきませぬ故に、結局、住宅の批判、推理等はその住宅のもつ雰圍氣の批判、推理であります。住宅の特性はその雰圍氣の特性であります。住宅の價值を決定し完成させるものは雰圍氣の香氣の度合であります。住宅の質とは、遂に、その居住者の質であります。雰圍氣の生長は住宅美の生長であります。依つて、將來の住宅に必ず要求さるべきは、居住者の人格趣味性等の偽らざる直截簡明なる表現の道德性であります。

震災と都市問題雜觀 (四)

楠原祖一郎



4、公園の

種類

前項は公園の面積の問題でありましたが本項に於ては公園の種類

問題に就て論じたいと思ひます。

公園と一口に申ししましても、種々の形式がありますが、木を植へたり、花を造つたりするばかりでは、公園とは云へぬものです。公園は市民の爲めに、一日の慰安所でなければなりません。だから其の計畫の時にそれを克く頭に容れて置かぬと造つてから後それが變テコなものになります。樹

木を植へるのがよいからと云て、歩く所もない位に木を植へたり、澤山に芝生を作つてそこへ立札を立て『芝生に觸れてはならぬ』杯と窮屈なものでも困ります。幾つもの公園を作つて、各々特徴づける事が必要であります。運動本位の公園、散歩本位の公園、娛樂本位の公園と分ち、大きく云へば、子供本位の公園、大人本位の公園を種々に形をかへて造る事です。そしてそれぞれ組織的に公園を各方面に配置して、それを縫ふて歩くパークウェイを造るのです。そして其のパークウェイは都市の放射路線を以て代用せしめてもよろしい。又其の放射線を代用するとすれば、其の路線との地理的關係に依つて、公園の配置を決定する事が必要になつて來ます。そして此の路線の極端の地理的關係に於て、公園の種類を決定する事がよい

と思ひます。私の常に頭に持つてつてゐる事が、其の都市の公園は市民の保健と密接な關係を持つてゐるものであるから、市民の疾病狀態を考慮に入れて置いて、公園の種目を決定すればよいと云ふ事です。

その都市の住民に結核患者が非常に多數であるのに結核患者に適しない公園を澤山造つてもよくないし、又傳染病が克く流行する都市もあるとすれば、傳染病の傳波を防ぐだけの體力を作る爲め運動獎勵の公園を澤山造らねばならぬ等と云うた事が非常に必要でありますから、大阪市等で今度新に公園を新設する場合には、その邊の所を克く考へねばならぬ事と思ふ。

凡て今回は當初デザインの時に注意して作れば其の公園がある間、市民が利益しますが、一度其のデザインを誤れば、其の公園がある間、市民は迷惑する事があります。公園の種類を決定する事もそれと同じであります。

5、公園の音楽

プラツセルやロンドン等のロイヤルパーク、ニ

ユークやベルリンの中央公園では、四六時中軍樂隊が音樂堂に出演して、民衆の爲めに藝術を公開してゐる。日本でも日比谷の音樂堂へは克く軍樂隊が出演するが、歐米のそれと比較すると、まだ／＼開放的ではないそうです。

彼國では、大低午後から始めて夜は遅くまで、青いアーチ燈の下で、綠樹の影を浴び乍ら、出演する人も、それを聞く人も、恍惚として自然の中に抱擁されてゐるそうです。何ん云ふ美しい場面でしょう。それを勤め先きが退けて自宅へ戻る途中で、一寸一二曲を立つて聞いてゐるものやら椅子代十仙を支拂ふて、奥さんは針仕事をし乍ら子守りは子守りをし乍ら、紳士は談笑し乍ら聽いてゐるものやら、日本等で一寸見られない光景が現れるそうです。日本では奥様はごこでも、家の奥座敷に座つて鉢仕事をするものとされてゐます。併し西洋では前申した様な具合ですから、凡てが大分異つてゐます。日本では針仕事をしつゝ椅子代を支拂ふて、公園の軍樂隊を聴きに行く人はあまりないでしょう。公園の軍樂隊は、西洋では

管に奥様を引つ張り出すに留まらず、陸軍の將校をして、愛妻と手を組むで、而かも從卒を引連れて、ふざけ乍ら公園の音樂堂まで引張りだすそうです、時々は政界の名士が、その椅子を相争ひ占領して、音樂を聴き乍ら、政治を談じ、その中を公園カフェーのウェートレスが賣りに廻る、コーヒーやケーキを飲むだり、食つたりして、大切な問題の相談をする事もあるそうですから、公園の音樂も人を民衆化しむるには中々都合めよいものです。而かも向ふの國の軍樂隊は自分の國の音樂を彈奏するのですから、實に其る色調などは堂に入つたものだそうですが、日本の下手な音樂家等が、西洋の音樂を模倣して、一回のコンサートを開くのに、頗る高額の會費をモノポリする等は一寸考へねばならぬ事ではないでしょうか。

6、公園は自然の防火壁

公園と云ふものは右申す如く、種々の影響を吾々に與へるものですが、就中最も今回の震災で、目立つて役立つたのは公園であります。

公園は實に自然の防火壁だと云ひますが、それ

が現實に證明されて居ります。上野公園では同じ下谷でも、公園の南西部は丸焼けですが、東北部は只た地震に依る損害で止まつて居ります。是等は即ち廣大なる面積を有する上野公園の存在に依つて、さしもの猛火も公園の向ふ側まで飛火する事が出来なかつた爲です。其他にも這ふ云ふ例はありますが、然し公園の面積が狹隘な場合は、今度の様うな大火震に當面すると、全く何んの用にも立ちませぬ、只だ地震の時にのみ、避難場所として立派に役立つのであります。前申しました如く、東京は大阪に比して公園の面積は、ザツト四倍、實質的には六倍の面積を以つてゐますが、其の東京市の場合に於て尙且つ今回の如き慘狀が現出されたのであります。若し大阪だとすれば、大阪の如きは全滅を免れないのです。そんな恐ろしい感情を吾々に抱かせたのは、今度の大地震ですが、實申すと、今度の大地震は、吾々の眼前に對して何十億圓と云ふ莫大な破壊を敢へてして、實際のお手本を示したのであります、即ち東京の人々は何十年、おそらくは何百年か要つて、先祖代

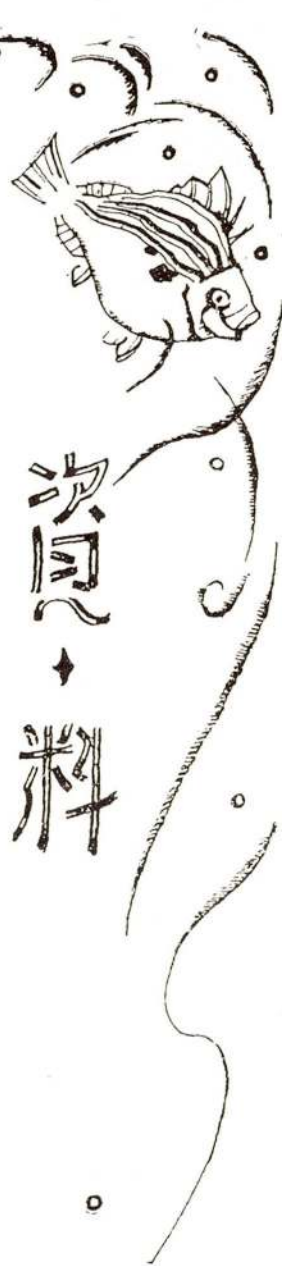
々蓄積して來た富の全部又は其の一部を、此の震災に依つて破壊されて、其のお手本を吾々の前に示したのですから、大阪人たるものは東京の氣の毒な人々に對して、眞誠を以つて感謝し、その轍を踏まぬ様うに心掛けねばなりません。

そうするには、少々の犠牲は要りますが、市内に於て市外に於て、實際必要な空地とか、公園を設置する様にせなければ、何時如何なる災害が生ずるかも知れないのでありますから、未前に其の用意が無ければなりません。是れは都市經營の當局者のみの責任ではなくて、市民全體の責任であります。

大阪の或る實業家が、大阪の都市計畫當局に向つて、其の計畫が廣大に失するとか云つたそうで又それと同じ意味に於て「土一升金一升の高い土地を、徒らに市内に公園などを造る計畫をして、閑人の遊び場所を、皆の臺所から搾り取つた税金で慥らへて行くなど、何んと云ふ馬鹿な考へだ、そんな金があるのなら、市民の負擔を輕めてはどうか」等と云つたそうで、私はそう云ふ事を云つ

た人を、責め様うとは思ひませぬが、一はその人の顔を見たいと思ひます。固より財政の事を考へる事が、都市經營上の重大な問題でありますが、市民生活を安全にして、眞に枕を高くして寝る事が出来る様うにするのが當局の仕事でありますから、金が要るからと云つて、それに手を附けずに放任してゐては、市民は其の都市に於て危険で生活する事が出来ませぬ。金が大切な、人間のライフが大切かと云へば、金よりも人間のライフが貴重でありますから、幾程金が必要てもそれは市民の安全の爲めならば當然手を附けなければならぬものです。

惟ふに日本の政府程、公園を喧ましく云はないものはありますまい。我國は天然に公園だから、人工的のものは必要でないと云ふかも知れませぬが、今度の様な場合に自然の儘では防せげますかやはり人工的に何が慥へなければなりませんのでしよう。日本の人々は眼前に事實を見ねば氣がつかぬと見へます、當局は眠つてゐるのなら、早く目を覺して欲しいものです。(續く)



次回資料

ばりあな—けな—でんでら—るくそる

——續 埃及遊記 (四)——

工學博士 天 沼 俊 一

十月二十六日 (木曜、好晴)

昨夜の騒ぎで眼が冴へて了ひ、漸く眠つたのは彼是一時頃であつたらう、ところが朝迄に身體中が痒くて三四度も起きた、搔くとき少し痛いのは確かに南京蟲らしい、併し眠いのが勝つてたう／＼寢て了ひ、四時半に案内人に起されたが、起きてみたら足や手や頸の圍りに、立派な證據が澤山に

残つてゐた。

此蟲の偉大なる種類が、倫敦市の目貫の場所、High Holborn の建築書院Batsford の店にさへ棲息してゐるのだから、埃及國の張杁村にゐるのは寧ろ當然である。此頃は客がないから、屹度幾日も斷食して丁度空腹のところへ、珍客が泊つたので總勢舉つて大歡迎をしたのであらう。

起きて支度をして待てども待てども食事にならぬから、其爲め汽車に乗り後れては大變だし、幸ひ昨日命じておいた馬車はどうに來てゐるから、朝食をやめて驛へ行かうと言ひ出したが、案内人はもう直に食事が出来るし、まだ大丈夫だといつて中々動かぬ、けれども氣が氣でないから、自分で荷物を持つて下に降り、直にも自分丈け出かける様に見せかけ、大々的に示威運動をやらしたから、彼も仕方なしに續て階下へ來た、そこへ漸く食事が運ばれたから、殆んど鵜呑みにして驛へ駆け付たら、丁度下りの一番と私の馬車とが同時に驛へ入つた、勿論切符買入のひまがないから、案内人をして驛長に無切符乗車を談判せしめ、辛ふじて乗車する事を得たのであつた。

斯様な際ごい場合には、埃及の鐵道従業員は歐米各國に於けると同様、至極わかりがよい。どこかの全國狹軌線許りの國の鐵道雇員の様に、杓子定規一點張で少しも融通がきかず、旅客を失望させる様な間の抜けた動作は決してしない。印度でもこの通りで、時には緩に失しはせぬかと思はれる

様な點さへあつた。かうなつてはいけなさが、規則のゆるす範圍で常識をもつて萬事旅客の便宜を圖る事は大に必要である。故にその狹軌國でも月給の高い人許りでなく、車掌や改札掛を常識養成の爲め、在外研究員として歌米へ在留を命じたらう。

夫れは兎に角、私は危いところで汽車に乗れた事と、張玲滯在中白魚と鹿尾菜とを喰はされたかつた事とを喜ぶと同時に、二夜世話になつて南京蟲と蚊とに攻められた木賃宿の屋號を逸した事を大に遺憾とするのである。いづれ Hotel Baliana 位の所であらう。

仰も Egyptian State Ry. の線路たるや、開路市を發して直に ナイル を渡り、左岸に沿ふて走るが今日はまた鐵橋を渡つて右岸へ來ると、前七時四十分に ケナ驛 へ着したので下車、直に Dendera の Temple の堂に向つた。又渡船で彼岸へ渡らねばならぬ。若し此の線路が開路市をでてから紅波山迄は右岸を、そこから デンデラ 迄左岸を、次に再び右岸へ渡つて ルクソル 迄來てゐるのだと、古蹟

觀覽の爲めには甚だ好都合だが、鐵道を敷く時技師はそこ迄考へなかつたと見え、こつちの思ふ様に出来てゐぬから、時間に無駄が出ていけない。併しさうだと、ミニアで船遊びが出来なかつたらう、だから二ついい事はない、ごつちか犠牲にしなければならぬ、だからまあ仕方がないとしておく。

驛から渡船場迄二十分かつた、夫れから相當に時間をかけて對岸へ渡つた、時に八時五十分、こゝから驢馬へ乗つて途中を急がせ、九時半に漸く目的地に着いた、だから今朝停車場へ着いてから二時間かつたのであつた。

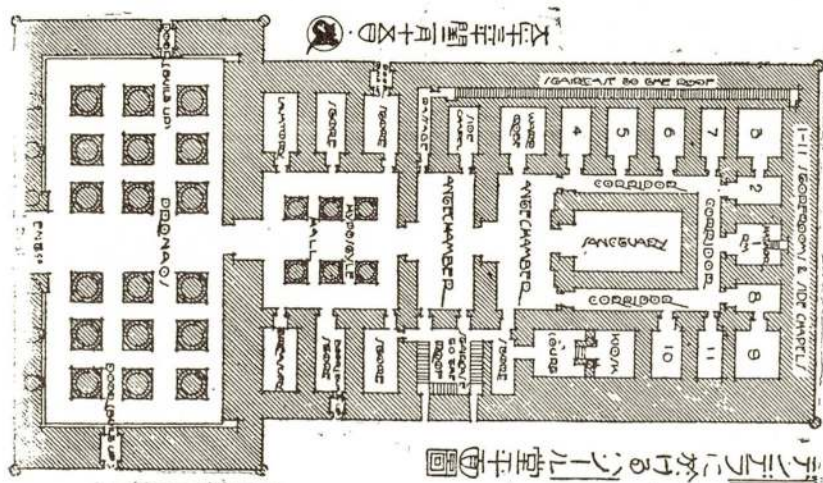
Dendera (一) Denderah) は希臘人の所謂 Teny, である、埃及に於ける著名な古都の一に數へられ、昔は上埃及第六縣の首府であつたが、此地に淋しく一大殿宇が建つてゐる、祭神は Hathor と呼ぶ喜樂愛情の女神で、天上と兼て黃泉の女王人であり希臘人は Aphrodite にあてゝゐる、主として當地及び ブルクソル に近き Aphrodisopolis に於いて禮拜せられたので、其姿は氣高い婦人の立像



女神 Hathor 立像、喜樂愛情の神、天上、神で兼て黃泉の神、テンテラ及アフロザテスボリスで崇拜され、又墓地の守護神としてテベスでも拜まれた。

であるが、時には牛頭人身の形で出現する事もあつた。嘗て非常の信仰を集め、帝王を初めとし善男善女の參拜引きも切らぬ有様であつたが今は内々陣もからつた、そんな殊勝な心懸で來るものは一人もなく、たゞ堂を見物するためだけであるのは言ふ迄もない。

當堂は上埃及に於ける此種の建築としては、寧ろ普通の型であるが、多くの場合の様に正面に大



門及び中庭を缺いてゐる、だから正面に直に大玄關を見ることが出来るのである。ナイル沿岸に於ける最も新しい古蹟の一で、今を距る僅に二千年前、換言すればトレミー時代末葉より羅馬時代初期にかけてのもの、即ち西紀前一世紀の建立にかゝるのであるが、實はたつた二千年位等といふのは贅澤の沙汰で、これでも我國最古の建築として世界に有名な法隆寺の堂塔より正に七百年の先輩である。

羅馬人が埃及を占領した事は、建造物の保存に大貢獻をしたので、トミシアン帝は北大門全部を建てたといふことである——今兎に角中央の入口丈けは残つてゐる——果して然らばルクソル以北の諸堂に於いて見る様な形のものでないとしても埃及式の相當に立派なものであつたことは考へられる。

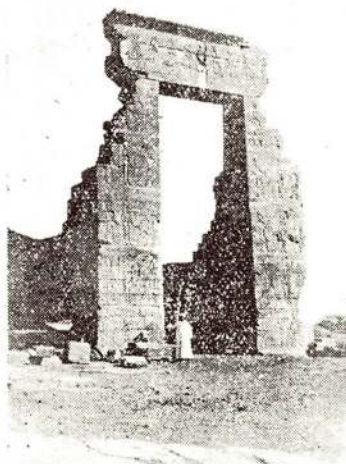
大玄關中央入口の左右には十二本づつ、合計二十四本の大柱が建つてゐるが、其内左右三本づつは側柱になつてゐて、其下半部は石壁で積んでゐるから、柱は割合に低く見ゆるが、此れが爲め反

て威嚴を増してゐる。で一度で此中央の入口より大玄關に入ると、そこには残り九本づゝの大柱が遊離して建つてゐて、其上部には如何にも物淋しい世間的な此女神の顔がついてゐるところは、まさにあの世の女神に相應しいと同時に、彼女に對する信仰が全く地を拂つて了つたのを悲むものゝ如くに見え、異教徒で且つ豫てから大して信仰心のない私も、何となしに憐哀の情を催し、何度か女神の顔を見上げて低徊去るに忍びなかつたのであつた。

此大玄關の後ろに列柱堂がある。こゝの柱も同じくハツール柱であるが、大玄關のより細く従て短く、且つ數も六本はかない。日本の神社に當倣めると、大玄關が拜殿、この列柱堂が石の間、其後ろにある二つのAntechamberは本殿の外陣、内陣で、まん中のSanctuaryを内々陣に擬して丁度よからう、其周囲の各室は何れも附屬物だから問題にしないでおく、かう考へると、我の國權現造にあたるから、誰れにでも早判りがしてよからうでこの内々陣は、全く光線なく、たゞ正面に入

口がある許りで、今でこそ古蹟觀覽券さへもつてゐれば大威張で誰れでも入れるが、往昔はたゞ王様丈けが、夫れも年に唯一回丈け參拜し得るのみであつたのである。

ハツール堂正面のPropylaeonの内側より見る。



奥へ行くに従ひ漸く光線は不足して來るし、此上此堂には玄室(Crypte)もある、巾は狭いしそして僅に其一部分を見せる丈けであるが、其壁には當時のreliefが一面にあるから、行つたら是非一寸でもいゝから見るべきである。こゝに於いて懷中電燈が必要になる、私は其用意がなかつたので

止むを得ず蠟燭でみたが、これでも充分であつた。地下室へ降りる石段は少しく急だが、反對に屋上に出るには、本殿内向て左側の厚壁の間に造りつけてある極めて緩勾配の長い直線の階段を昇るのであるが、扱て大玄關即ち拜殿の屋上に立つてみると、南方は眼の及ぶ限り強烈なる日光に照らされたリビアの砂漠は渺茫として際涯なく、北方は直下左方に所謂 Birth House やコプト僧庵の廢址をみ、遠く兩岸に綠に繁茂せる玉蜀黍畑を有せるナイルを望み得、阿非利加氣分を充分に味ふことが出来るのである。尙ほ本殿の屋上西區隅には氣のきいた小堂があり、また同じくハンソール柱を建つ。

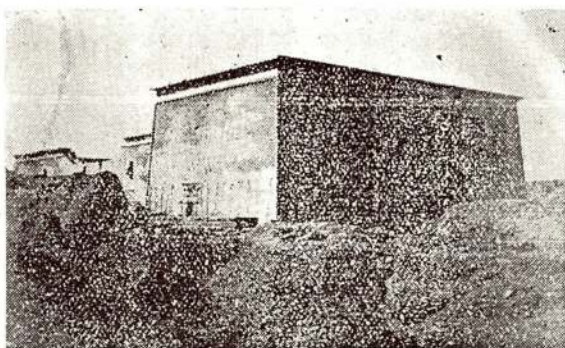
堂の周圍の壁には相不變の彫刻が一面にある、其後方、中央より向つて左の方に、Cleopatra 及び其子の Caesarian が刻んであるといふので、こゝへ来る程の人は誰れでも後ろへ回つてみる、大したものではないが話しの種にはなるから、一瞥するがよからう。壁面から外方に突き出してある獅子の頸は屋根からの水吐き(Gargoyle)である。

堂の西北隅に並びたてるコプト僧庵と所謂 Birth House の内、前者は左して興味を惹かず、後者とても數日後にみたエドフウ堂附屬の夫れよりは落るがこゝで私は初めて開花せる Composite Capital をみたので、拜殿、石の間及び屋上小屋の女神柱と等しく、深く頭の内に刻みつけられたのであつた。他に西南隅に本殿を少し離れてアイシスの小堂が建つてゐるが、これは頗る平凡であつた

× × × × × × ×

昨日飲んだナイルの泥水のお蔭か、今日は少しく下痢の氣味がある、飲物を節する位の事は心得てゐるが、どうも暑いせいか渴いて仕方がない、他に何もないから止むを得ずラムネを命じたが、今日のは下の方に澱がある、水を取りよせたら昨日と同じ赤砂糖入だ、最早再び此水を飲む氣にはなれぬから、漉した水をくれと云てみたが、これはお生憎様ださうで得られなかつた。こゝら邊の堂守の胃腸は先天的に强健なる事牛馬鶏犬の夫れの如くである、彼等は決してあたらぬと信じて飲むのだから、泥水だつて差支はない、また實際紀

元前五千年頃から未だ曾てたあつた事はないのだから、漉水なんて手のかゝつた愚なものをつくる必要はないのである。私はやむを得ず遂に思ひ切



Dendera の Hathor 堂東北方より見る

正午十二時に堂を辭し、途中驢馬を急がして川畔迄戻つて來たら、丁度渡船は岸を離れたところ

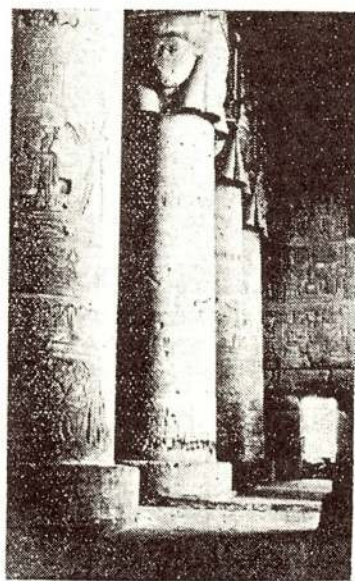
つて我慢してつた。我慢が出たのだから、これ即ち左様渴いてゐなかつた證據かも知れないが、實は随分苦しかつた、將來ナイル沿岸を旅行せらるゝ人は、必ず魔法瓶のなかへ宿屋から飲料を入れて行かれる事が必要であると思ふ

であつた、馬方や案内人が大聲を張り上げて喚いたが、船は知らん顔で出ていつた了つた。仕方がないので次の船を待つ間、川に面せる村のある大きな家の入口に腰を下ろして休んだ。此時は最早到底辛棒の出來ぬ程に咽喉が渴いてゐたから、漉し水があつたら一杯くださいと申込んだら、早速出してくれた、今度は透きこほつてゐたから大喜びで大分に飲んだので生き返つた様な心持になつた。續て主人は紅茶を出した、一口飲んでみたら妙な味と變な臭ひがした、尤もこの妙だの變だのといふのは、不斷飲みつけてゐるのに比較していふので、決して不味といふ意味ではない。恐らくこれは村々の大百性である埃及つ子の平生の飲料であらう、さう考へると洵に千載の一遇であらうから、もう一杯ほしかつたか、水をさんざんやつた揚句だから、折角の厚意を辭し二杯目は遠慮しておいた。さうしたら、今度は牛乳をくれるといふので心中大に喜んだ、屹度搾りたての水の交らぬ上等のをくれるのだらう、どうも此家は村一番の大世帯らしい、だから主人は必ずや好意を以

て——好奇心を以てとは考へ度くない——東洋の珍客を待遇するのだから。バクシーシュ(Bakshish, Bakhshish || Gratuity, Tip)を異口同音に叫び、手を出してうるさく付き纏ふ乞食の様な人間許り住である埃及でも、矢張上流人士はちがつたものだど連りに感心をして待つてゐると、やがて大鉢を盆へのせ、小皿と匙とをつけ、別の皿にこれも土人の常食なる埃及麪包を添へてもつて來た。

鉢の中をみると、豫想は全く當らなかつた、夫れ丈けならよかつたが、實はすっかり凝固してゐた。搾りたてどころか、すっかり凝固してゐて見たところ胡摩豆腐の如く、色は純白で且つ異臭鼻を衝く。我國で一時流行した——今でも流行してゐるかも知れぬが——ヨーグルドとか呼ぶものは、私は試みたことはないが、人のたべてゐるのをみたとき、丁度こんな風で變な臭氣があつたと記憶してゐる、多分其種類であらう、此溫氣に腐つた牛乳等義理にも食へるものかと思つたが、此邊の而も立派な暮しをしてゐるものゝ常食である以上、食へたところで虎列刺になることも限りはし

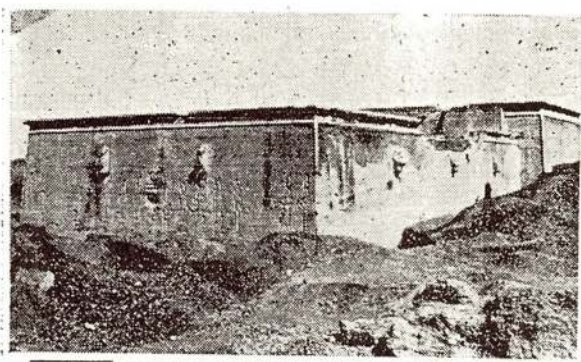
まい、こんな機會は再び得難いから、話しの種にしようと思つて、一所に出て來た埃及麪包へつけて少し味つてみたが、うまいどころか牛乳の臭氣で何とも致し方がなかつたから、いゝ加減にやめ



大玄關内部ハツール頭柱

たが、傍をみると Donkey Boy も案内人も舌鼓を打つて盛に平げてゐる、藜喰ふ蟲もすきすきからといふ諺があるから、敢て抗議は申込まぬが、よくあんな臭いものが喰へるなど大に感心をしてみてゐた、此も亦千載一遇。合計二遇であつた。

斯く渡船の用意が出來たので夫れに乗り、ケナ



左でる
つて像
向の
内
彫刻
及び
壁の
後、
見
り
方
南
東
堂
ソ
ハ
より
ある

村の Hotel Dandara へついた時に正三時。此屋號は看板をみるなり直に「段段館」^{だんだん}といふ當字が出来たので素敵に氣に入つたが、建物はミニアの御殿館と伯仲の間にあり、張吟の木賃宿よりいくらかいゝ位の程度であつた。未だ晝食をして居らぬが

先刻の牛乳が胃の中で固まつてゐる様な氣がしてゐてさう大して食べ度くない、其上、連日の努力が少しく疲労を覺え、ねむくなつたから、晝は抜く事にして、直に寢臺の上にひつくり返り、氣持よく

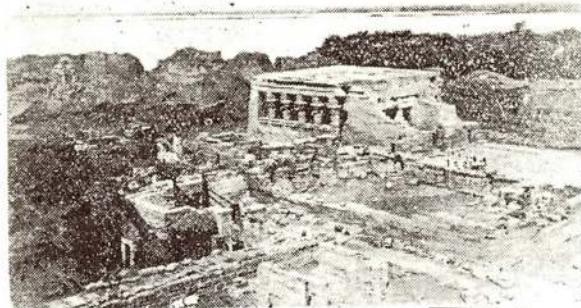
一ね入して起きたら四時半であつた、顔を洗つて日記をつけ出した時、到底望みがないとあきらめへメダは金の請求に入つて來た。

彼は先日來立替の金額は此通りといつて、暴夜文字で認めた紙片をひろげ、毎日使つた金額をいふので、夫れをかきつけて計算してみると可なり金額になる、大分多い様だが故障を申込む餘地もなし、全く手のつけ^あがらない、信用あるクツク社からいゝのを差向けるといつてよこしたのだから、いづれ其通りなのだらう、虫が好かぬのは仕方がない、つけがけ等決してせぬ——但し夫れは表面丈けで、内證では随分悪い事をする——ものとしておくより他に方法はない。

夕食の時、案内人は私が開路へ歸つた時分に再び引張り出さうとして、盆に誘惑を試みた。先づ自分の家はギザの寶形塔の附近にある、之して景色も極めていゝから、當國退去迄に是非一度來てはどうか、二時間もあれば充分だから、宿屋へ迎へに行くといふ。斷る。では市場へ案内しやう、市場の光景は一寸他で見られぬ、充分話しの種に

なるといふ。市場なんか少しも興味がなからいやだといふと、今度は他へ誘ふ。何故かくうるさく附き纏ふか、大凡の見當がつかなくもないが、乍憚其手には乗らぬので、少なくとも表面好意的に見ゆる彼の申出を一つも受付なかつた。彼は暫時考へてゐたが、然らば九月三日の正午頃牧羊館へ出向き、五日迄の間に適當な日時を伺ふ事にして度いといつたから、私は宿屋へ来るのは勝手だが待つてはゐない、折角だがお前の家へ遊びに行く時間があるなら、一つでも餘計に寺でも見た方がいい、ギザは先日一日かけて充分にみたから、再び行く必要はないのだ、といつた。實の所思ひ切つてこれだけいつたのだ。そして彼は妙な顔をして黙つて了つた。即ち此談判は私の勝利に歸したのであつた。

食事を了つた時、彼は突然『ここによつたら、ムスタファが下に來てゐるかも知れぬから、一寸探してみませう、其間どうかあなたは此處で待つてゐてください』といつた。私は承諾はしたが、此命令に服従する程人がよくもなく、間も抜けて



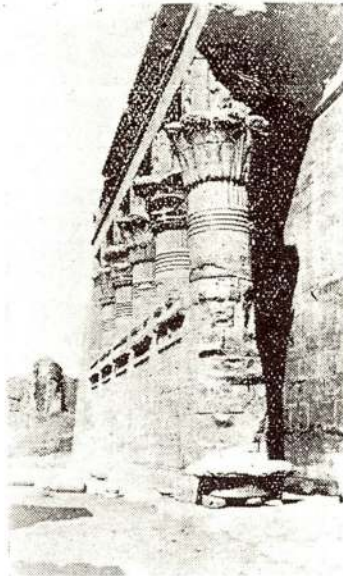
玄關屋上より所謂 Birth House 及びコプト僧庵
廢址を俯瞰す、遠景はナイル河。

居らぬつもりである。豫て開路の案内人 Ahmed Salah に命じ、二十六日午後當地迄來る様に Mustapha に宛て、電報を打たしておいたのである、だから先刻からもう來さうなものだと思つてゐた所であつた、だから Hemeda が階下へ行つた時分を

見計ひ、直にあそこから下りて往來に出てみたら軒下に卓を間にして彼とも一人背の高い男と話をしてゐた所であつた、背の高い男は私をみるや直に立つて一禮し名刺を出した此時こそ全く案外だつたと見え流石のヘメダは大分にまごつい

た様子がありありと見えた。してみると割合に彼も人がいいのかも知れぬ。同時にムスタファはサラーの電報で先刻こゝに着き、待つてゐましたといつた。斯くしてヘメダの計劃は全く書餅に歸して了つたのであつた。

新しい案内人が來て、そして其男が——どうも



所謂Birth House側面の開花復合柱頭。

職業的案内人だから格別の事はあるまいが——今日迄いやいや連れてゐたのより、遙かに好人物らしい顔をしてゐるので、私は大に安心をした。かうなると、ケナ村唯一の、そして御殿館と大差な

き段段館の二階にいつ迄もゐるより、一層驛の乗降場で涼しい夕風に吹かれ乍ら汽車を待つ方が、どの位いゝか分らぬ。

發車迄にはまだ大分に時間があるから、開路行上り列車が出たあと乗降場は私とムスタファとたつた二人になつて了つた。彼といろいろ話をしてゐる間に、偶然(？)今日雇つたDonkey Boyが來合せた、さつぱりした暴夜服を着てゐたので風采頗る揚り、最初私の前へ來て一禮した時は誰か判らなかつた位であつたが、よくみたら今日確かに私の驢馬について駆けてゐた男であつた。此男は何やら暫く新案内人と喋つてゐたが、やがて後者は私に向つて『先刻の案内人は驢馬に三十五ピ、ラムネ三本で三ピ、合計二十八ピくれた丈で、牛乳等を出したが何もくれなかつた』と言つてゐると告げた。してゐるき紅茶を出したり牛乳を出したりしたのはDonkey Boyの家であつたのかと思はれるが、實はこれは少しく變だ、あんな大きな家のよし主人であいにしても、Donkey Boyをせぬでもない筈だ。また假に道樂で馬方をしてゐ

るとしても、頼みもせぬのに紅茶や牛乳を出しておき、其謝禮をあてにする様な身分でない事は明らかである。且つ今日此男も私共と一所に食べてゐたのだから益々あやしい。故に合計三十八ピも勿論あやしいが、ヘメダは今日の驢馬賃六十ピ、ラムネ代十五ピ、合計七十五ピを請求したのだから若し馬方の言を確實とすると、案内人は五割儲かつてゐる、萬事こんな調子で四日間搾られたらしい。但し無論證據はないのだが、兎に角ヘメダの不都合な事丈けは確かだ、尙ムスタファは『あの男はごうも性質が悪くて、あんな手で今迄にためた財産が七八千磅といふ噂だ』と附加へた、商買仇のいふことだから多少お負けもあらうか、搾る手段はもつともつと遙に惡辣の方法を講じたらうと思はれる、私等も開路へ歸つてから、うかど彼の言にのつて遊びに行つたら大事になつたのであつたらう、將來埃及遊覽を企てらるゝ諸彦は、御注意が最も肝要である。

ケナからルクソル(Luxor)迄汽車は二等へ乗つたが、幸ひに大變すいてゐた、其上に好まぬ男を

掴拂つて安心をしたせいか、汽車のうちに寢込んで了ひ、ルクソルへ着いたとて起され下車する。宿から番頭か乗物を用意して迎へに來てゐた。此時此邊の案内人が蟬集して來て、各々私を擒にし



屋上西南隅小堂、其背景はナイル河。

様とかゝつたが、機をみてムスタファが
 “I am your
 dragoman”
 — 暴夜語 —
 urgunan 通辯
 人——と口を
 出したので、
 皆な黙つて引
 込んで了づた
 かくて順路Luxor Hotelへ
 着し、明朝の

時間を約して案内人を歸らしめ、第六十七號室へ無事に納つたのは十一時半であつた、早速紅茶を

命じたら、もう晩いからラムネにしてくれといふ
取寄せてみたら流石にこゝのは上等であつたから
一息にのみほして直に床へ入つた。静かで綺麗で
おそろしく氣持がいゝ。

(大正十三年三月十四日稿了)

~~~~~

花 榮 暮 る 小 池 邊 へ

泊 り つ き し 筏 か な

前號正誤來

頁 段 行 誤

正

五八 下 四 Abotw Abotu

五九 上 一四 マリエットをマリニツトが

六二 下 一八 大宮大寺 大官大寺

其他本文は圖の説明中にある「院毘度」「阿毘都」等  
は何れも「阿倍度」と訂正す。

# 畫界に於ける新傾向 (中)

春陽會審查員 齋 藤 與 里

此の前期、後期と云ふ言葉に就いては多少弊害がある。後期印象派が所謂印象派の後に起つたと云ふ意味ではない。が、さう云ふ習慣になつて居るから、之を後期印象派として置くが、是は先の印象派の反動として飽くまで自主的に、出来るだけ自分自身の感情なり思想を現すと云ふ風になつて來た、詰り繪畫の生命は自分自身を活すと云ふ所にある。自然と云ふものが客觀的にあるのは、自己を問顧外に置いた場合だけで、本當に自分自身を主にして考へた場合には同じ形をしたものでも、見る人に依て色々變化して來る、具體的に云へば、裸體を書く場合にしても、自然派印象派の立場から描寫すると、知識の無いことが一番其の繪畫を正視し直視する結果になりはしないかと考へる、唯度数を重ねて見ると云ふことは必要であるが、要するに繪畫を見ると云ふことは、全く虛

心平氣に其のものに對すると云ふことが、繪畫觀賞法の秘訣である。と云ふ風に私は解釋して居る。實物が六尺あるものなら、矢張り六尺と云ふ風に寫眞に撮つた如く、實物に比例した形のものが其處に現れて來る譯である。けれども後期印象派の立場からすれば、其の紙の釣合とか、形が實物と違つて居つても、それは問題ではない、最近に進入つて來るものの中には、能く顔が非常に小さくて、脚ばかり大きなものや、其の顔の色が人間の顔の色とは思はれない程極端に變つたものとか、黄色い毛を赭く畫いてあると云ふやうな色々變つた形のものがある。從來のやうな立場から見るとどう云ふ積りで、そう云ふものを畫くのか、解釋に苦むと云ふやうな繪が益々殖えて來る、それはどう云ふ所からさう云ふ風になつて來るのかと云へば、即ち自分の氣持を主にすると云ふこと

が根本だと思ふ。例へば有名な「ロダン」の彫刻に「マルセ」と云ふのがある、あれが私共の佛蘭西に居た時、秋の「サロン」に初て出品された際には非常に問題になつた、夫は唯脚を踏張つた腰から上の無い彫刻で、而も正面の入口に陳列されてあつた、それを見ると、如何にも在來の彫刻からは非常に懸け離れて居つて、婦人などには見るさへも汚らはしいと云ふやうな態度に迎へられたものである、從來の彫刻に對する眼から見ると、或はさうかも知れない、けれども人間の脚を踏張つた形をあれ以上に現したものは我々が曾て見たことが無い程、其か自然な形に於て、又踏張つた其の力に於て寫實としても最も「レアリスティック」な非常に活々としたものであると云ふ風に觀得出来る。それは思ふに、内觀と、外觀と、狙ひ所の解釋の違ひであるやうに考へたのである。唯外側から見ると、從來の彫刻、又實際の人間とは非常に違ふけれども、之を自然の人間が有つ色々な内容から觀察して見ると、其處に決して不自然でない活々としたものがあるやうに思はれる。之をどう

云ふ風に解釋したら可いかと云ふと、餘り細かい話になるかも知れぬが、脚を踏張つた形は、「コンパス」を以て測つて、もう寸毫も實物と違はないものが出來上つたとしても、其の踏張つた脚の力を其處に盛り込むと云ふことはなか／＼出來ないそこで全體の釣合として可怪しくとも、其の自分の感じた脚の力を現す爲には、或る實際のものよりも誇張して、大きく現して來る。即ち外觀の形式と云ふものを全く犠牲にしてまでも自分の感じたものを出して來ると云ふのが、彫刻のみならず、後期印象派の繪畫に於て非常に怪異な解らないやうなものが生れて來る原因であらうと思ふ

其の後伊太利に於て未來派と云ふものが起つて來た、是は元と伊太利の詩人「マイネツツ」が文學の方面から起した運動で、それが繪畫、彫刻、建築、總ての方面に波及して、一時は未來派の宣傳と云ふと云ふものは非常なものであつたが、是は先にも云つた通り繪畫の本流と見ることは或は出來ないかも知れない。それは自然に起つて來たものでなく、古美術に對する一種意識的の反抗運動

であつたと云ふことが、繪畫の本流を外れたのではないかと云ふ風に觀察さる。

それはどう云ふ風にして起つたかと云へば、伊太利は御承知の如く美術の寶庫であつて、有らゆる方面に於て世界に誇るべき美術を有つて居る。其の者は非常に立派な美術を生んだ伊太利が、現代に於て美術國としては全く見る影もなく、其の繪畫の如きも世界で一番劣等なものでないかと見られるやうな状態になつたのは、詰り古い美術に満足しこれに捉はれて現代の美術家が進取的態度を取らない結果である云ふやうな解釋から、其の反動的運動として、或は美術館の焼討を企てると云ふやうな譯で、古きものを葬れと云ふ極端な運動が一時伊太利に起つた。向ふから送つて來た當時の未來派の宣言書を見ても、何でも新しいものでなくてはならぬ、既に過去があり、現在がある、我とは一足飛びに未來に生きなければならぬと云ふ風で、意識的に餘りに焦つたやうな傾向が見へた。理論としてはさう云ふことが出来る云ふことは、一大發見で、非常な進歩であるかも知

れないが、繪畫の本領を忘れて居るやうな形がある、從來の繪畫は停止したもの以外には畫くことは出来ない。木を畫いても、家を畫いても、人間を畫いても、停止したものだけしか畫けないと云ふことは、美術家に取つて非常な制限を加へられたものであつて、もう少し奮發したならば、走つて居る汽車でも、歩いて居る人間でも、飛んで居る飛行機でも、皆自由に表現が出来なければ、本當の進歩はないと云ふ風な意識的な理論上の考へから、強ひて夫を表現しやうとしたのが未來派であつた。けれどもそれは最初のことであつて、段々内容も違ひ形式も違つて來て、さう云ふ宣言の下に生れた未來派と云ふものが、何と云つて可いか、主智派とでも云ふか、彼の佛蘭西の「ピカソ」あたりになつて、自分の知識を主にした所の一種の繪畫が生れて來た。





斯の明るい氣  
持ちのよい部  
屋は、皆さん  
のご自由にお  
這入り被下つ  
てよいのです  
そして皆さん  
の鬱たる初氣  
の安全瓣に  
御使ひ被下つ  
たり又はご相  
談事や、ちツ  
と興太やユ一  
モアの二つも  
飛ばして頂く  
も結構です。  
併しお見掛け  
の通りに部屋  
が隘いですが  
多くの方に機  
會を均等にし  
て頂くため、  
餘り長いお話  
はご利用被下  
い。勿論ご品  
格を重んじて  
のお話しに願  
ひます。(係)

## 斯の欄の投稿を募ります。

成るべく多くの方に使つて頂き度  
いのですから、葉書でか又は短い  
文章を歓迎致しますが上記の掟を  
讀むで被下い。

締切は毎月二十日迄です。



# 漫録 建築の世紀末

櫻 木 浩

背後にその時代を有だなかつた藝術は曾てあらぬ。自由は藝術の奪ふべからざる本質ではあるが時代から字義通りに自由であり得た藝術は今日まで多分ないであらう。藝術が常に時代の先驅であるとの寓意も、決して、藝術が没時代に獨存し得るとの謂ではないやうである。藝術の有つ全らゆる零意氣も畢竟その時代の有つ周囲の何等かの意味での印影にしか過ぎないであらう。時代の轉變

は藝術の流動をみちびく。藝術の全面が時代を忘れて獨り生長し得べき筈はあらぬ。曾て拘束と因襲とのクラシシズムの世界を徹尾までに打破して恣にその埒外に飛躍し、創見と自由との天地にその生長を發見しやうためにのみ、彼のロマンティシズムはその出發を初めたのである。時はフランス大革命に前後した十八世紀後期より十九世紀前期にわたる世紀の動亂期であつた。一言で言へば

時代は生むべき藝術を生んだのである。所謂時代精神とは單なる思想上の空語ではない。時代精神の特質は多くの場合すぐその時代の藝術の特質となり得るものである。或る藝術は畢竟或る時代の子である。

近代の特質は、一言で言へば、それ自身が既にその内容に於いて何等一定の特質と呼ぶべきものを有つてゐないところにある。雑多繁俗な主義主張等の流動ではあるが、最密な意味に於いて一定の生活様式を有たないことが、近代生活の特質であるらしく思惟される。言ふまでもなく、近代文化の背景は所謂自然科學の開發生長であるであらう。科學、秩序、合理、批評等の字句は、怖ろしいまでに廣い分野に伸擡された近代の合言葉であるらしく見える。全らゆる思想は所謂科學を離れて生長し得ず、全らゆる生活は理想を去つて現實にのみ執着した。現實暴露、幻影滅却は近代の新しい發見であるらしく説かれた。而も、ロマンティズムの時代の香氣は、今も尚、高く此の時代の私達の生活へおしよせる。功利説はミルのみ

に主張されず、耽美説はボオドレエルのみの主張ではなかつた。一人は生の歡喜と友愛の悅樂をを歌ひ、一人は生の倦怠と敵視の失意をを歌つた。一人は輝く日光と健康をを歌ひ、一人は蒼い墓穴と屍の蛆をを歌つた。一人は文化禮讃に生き、一人は文化拒非に生きた。一人は生存競争を主張し一人は相互扶助を論議した。ニイチエのナボレオンは超人として威力のうえたに濶歩しトルストイのナボレオンは凡輩として平俗のうちに起臥した全らゆる近代への讚賞と咒咀とが同じ近代の同じ水平線上に相矛盾し相抗争し合つたのである。時代の避け得べからざる暗流は懷疑と無節操との淵へと私達を追迫し初めた。偶像破壊と神秘暴露とは時代の選ばれたる標語となり初めた。最後まで些の妥協、讓歩、折衷等を知らない激越なる自我の自由への開放は、内は痛烈なる自然人と倫理人との衝突反撥を曳起し、外は生への困憊、倦怠、恐怖、嫌惡等を誘引した。こゝは昂奮と刺戟との感覺の世界であつた。時代は無理想と無標準との混錯の時代であつた。一言で言つて、近代は狂奔

動搖の時代なのである。病的變質者と言ひ、又都市病患者と呼ぶ。全ては餘りにも生活意識を虐使過勞させた惠まれざる不具者の謂なのであらう。自殺者と犯罪者と、又絶望と悲哀と、自我狂と癡類者と、又失意と焦燥と、全らゆる誣妄歪曲は近代の内と外とを一杯に充てしまつた。世紀は單なる官能のみの世紀となり下つたのである。かうして、近代文化の救ひ難い爛熟は、やがて、こゝに私の言はうとする所謂世紀末の藝術を生んだのである。

近代藝術の特質も、従つて、その根底にその時代の動搖と同じ振幅を有つた動搖を感受するところにあるであらう。一切の曖昧を宥さず、全らゆるものにその赤裸々の眞を求めやうとの止み難き意圖から、一切の過去の理想信仰を無下に破棄し拒排し去つたところにその特質がある。加言すれば、而も、未だその求めてやまない眞の高遠の理想信仰を確く樹立し得ないところにこそ、その眞の特質はあるのであらう。一切は動搖の世界である。一切は目的なき流動の天地である。近代人の

やみがたき心の求望は、一言で言へば、打撃され昂奮させられるといふことである。兎も角も、理性を絶し意識を超えて激しく一杯に生きやうとの苦惱の深底から、全らある慣習に叛逆し、一切の權威と抗爭し、厭くまで自由なる個性の走るまゝに走らうとしてもがく。而も、餘りにも強激なる刺戟と痲痺との感覺の零圍氣に生きて、疲勞困憊絶望悲哀の深底に再び落下し果てる。人巧と虚飾と、酒精と香料とは彼等の周圍を一杯に充たし掩ふ。彼等とも早や單調靜平なる世界には到底安住し得る資格を有たない。彼等とも早や急がずして生きることは理解の目をすら有たない。彼等は唯無下に對社會的に狂奔しやうとのみ空しく求望する。故に、極言すれば、近代人にとつては生活とは地獄と同意義をもち初めたのである。従つてこゝに生るべき近代の藝術は、その求めらるゝ印象力に於いては極度にまで鮮明激越であることを要する。突飛、異變、奇矯、偏執等ともより避けないうところである。近代人のこの人生に先づ求め貪らうとするところは、激越なる劇的效果と

の末梢神經病的なる頽廢の地獄的雰圍氣である。變質的なる官能の病的なる刺激である。従つて、美は單なる夢の如き或るものに象徵であり、眼前の現實こそは即ち眞であるとの無批判なる誤算の上に、近代藝術はその誤れる出發を初めた。デカダンの放亂、本能人の誨姪なる言葉は上下を通じての廣い流行語となり初めた。醜劣は美であり、汚穢は眞であるとの偏執は、今や一般の常識となり初めた。従つて、醜惡は醜惡として時には極度にまで誇張されて私達の眼前へ投げ出される。屍體と醜行とは自白の下にあつかましく横行する。一切は歪んで、唯、刺激的でのみある。全らゆるところに激情、全らゆるところに唆感はある。美醜を超え眞偽を絶して、唯、刺激的であることにのみ近代藝術の本質は轉置され初めた。故に、近代藝術の價値はその昂奮の度合に依つてのみ決定され初めやうとしてゐる。そこには典雅沈靜の美はなく、鋭敏衝動的なる刺激があるのみである。従つて、粗雜、無技巧は近代藝術の奪ふべからざる特質となり初めた。そこには統一美はなく、繁

錯なる生活の一片があるのみである。そこにはヒュウマン・ドキュメントの片々はあつて、藝術の完成はあらぬ。かくて、藝術の一切はあげて今尙世紀末の混沌のうちに浮沈しつゝある。近代の美は、従つて、一見毒々しき妖艶の謂となり初めた。一切は形而下に轉落し果てたのである。

近代建築の様式にも、従つて、その嚴密な意味に於いては一定の表現様式と呼ばるべきものはあらぬ。ロマネスク時代の彼の全らゆる建築に現はれたる類似或は均等、ゴシック時代の彼の一切の建築に表現されたる綜合美は、今近代建築の世界には見られやうもあらぬ。全らゆる表現様式主義、主張、運動等は、全らゆる近代の生活様式の混淆亂錯と俱に、日夜に激しく變遷して遂に止まない。推移は推移を追うて流轉する。一言で言へば、人生とは畢竟遂に止まることを知らない創造的進化なのであるが、生活相の日夜の轉變の近代の如く激越なる時代は多分曾てなかつたであらう。近代藝術に於いて、その根底に確然たる準據を有たない所以である。傳統の固陋は先づ破れた

全らゆる他の藝術の歩みと其の歩みを俱にして、建築に於いても、クラシックの世界を出で、ゴシックの時代を超えて、こゝに混錯したる世紀末の藝術運動が曳起されたのである。模倣への叛逆、自己の開放はかゝる藝術運動の共通の標語であつた。新藝術派は先づそつ烽火をかゝげて新しき世界への道を歩き初めた。藝術は生長であるとは彼等の誇示したる信仰であつた。彼等は其の建築への理解を、生命の生長への理解を以つて初めた。従つて、彼等は生長しつゝある樹木の複錯したる形貌にその深い暗示を得て、一見即座には理解し能はざる奇怪なる曲線歪線を以つてその表現への道を歩いた。彼等の直感はいかうした曲線にのみ表現され得たのである。彼等の新しき發見は、約言すれば、極度にまで自由な曲線の過度な亂用から招來されるであらう。分離派も又かゝる世紀の病疾のうちにその新しき藝術を創生した。主張は言ふまでもなく過去派の一切の様式打破にあつた。彼等は一切の表現を自己一個の主觀のうゑに建て、

直截、簡明の世界にその生長を發見しやうと企圖した。彼等は一切の直感をその好むところの直線にのみ表現しつくさうと求望したのである。全らゆる直線は、彼等に依つて、全らゆる情操、信仰、靈魂等の不備なき表現として愛撫された。彼等の藝術上の價値は、多分、彼等の新しく創見したるその厭くまで自由なる直線の評價と同一であるであらう。彼等が失敗するごすれば、多分、その直線の極度の重用にあるであらう。歐洲大戰後の思想世界の驚異は、言ふまでもなく、表現派運動の不意の激しき爆發である。世界は轉變した。表現派乃至ダダイズムに依つて、私達の間人としての自我は文字通り極度にまで肯定され主張されつくしたのである。反抗、不満、焦燥、絶望等の全らゆる激情は今その頂點にまで昂揚しつくしたのである。一切は病的までの激しき奇體な異様な刺激の世界のものである。美の理論はも早やこゝにはない。美の認識はも早やこゝにはない。一切を超えた峻情と刺激と痲痺とがあるばかりである。今假へて藝術派と言ひ分離派といひ又表現派と言ふ

こは唯單なる流動の一小部分の波紋にしか過ぎぬことには尙他に數へらるべき數多の主張と運動とがあるであらう。一切は雜多繁激な流動の混錯である。一言すれば、建築の一切は、他の藝術に於けると同じく、あげて今も尙世紀末の混沌動搖の裡にのみ低徊しつゝあるらしく見える。行くべき藝術の眞の未來道を發見せずして、決して、新しき藝術の新しき健全なる世紀への轉生を企圖することはできないであらう。

近代建築の必ず行くべき健全なる正しき未來道は、従つて、かゝる意味の世紀末の雰圍氣から明るく自由になるところに發見されるであらう。それは單なる理想憧憬の時代のものではなく、單なる現實暴露の時代のものであらぬ。それは刺戟のためだけに努めてされたる刺戟の惡趣味なき、強ゐられたる異常なる昂奮なき、變態ならざる正しき世界のものである。それは所謂世界の醜化への道ではなく、本然への一切の復歸の道である。深き懷疑を通しての人生への痛烈なる肯定、暴露されたる嫌ふべき醜惡を通しての眞美への強激なる禮讃

の世界への道である。官能は單に未梢神經的なヒポコンデリアと變質的な鋭感とのみであつてはならない。自我は唯單なる奔放狂熱的な自我の盲目の主張ではなく、深く人生の眞底に厭くまで沈潜して後の清冽なる力強き主觀の確立でなければならぬ。目に見ゆるものは即座に現實ではなく、見えざる世界も直ぐ幻影ではない世界にこそ、新しき藝術はその正しき生長を初めるであらう。約言すれば、透徹せる優れたる直感の世界こそ、新しき世紀の藝術の選ばれたる母胎であるであらう。一步高く、一步深く、過渡期なるこの世紀末を超えての新しき道こそ、新しき藝術の行くべき唯一の道であらう。

難きものは避けず

易きものは從はず

# 夜の頌

建築叙情篇 (四)

廣岡峰太郎

川波が昏み、燈影が瞬き初めると、街衢の上に  
狭霧の彼方より、夕闇が訪れる。

夕闇の底に、微笑む建築と、それから間もなく  
やつて来る夜のコントラバスの唄ひ手に、頌へら  
るゝ沈黙の建築とに就いて——夜の建築の齋す暗  
黒と、光明。微笑と、沈黙とに就いて、一の考察  
を廻らす事も、徒勞な事では無からうと思ふ？

夜は、悲壯沈痛に、或は典雅華麗に、建築物の  
對象となつて現れて来る。

夜は、建築をして、古代彫刻の様に、或は中世  
の薄肉彫の様に、或は未來派の彫刻の様に見せる  
雪、霜、霧、靄等の氣象は、夜の建築の美の、  
對象としての良きステージメントである。

夜は、建築の上に、建築美の上に、靜かに歩み

よる。

單色に見えて、而して滋味ある、限りなき濃淡  
の陰影が、建築を、複雑化し、又單純化する。

建築細部の持つ陰影より、建築外廓の持つ陰影  
に至る迄で、多岐多様に、その陰影の持つ豊潤さ  
を、感得せしめる。

列柱の中の、一柱に於ても、ベースより、キャ  
ピタルに至る迄で、幾多の、オブリガートとし  
ての、陰影が、列柱全體の、伴奏に役立つことを  
知る。

各部分に分たれたる細部が、實は分たれてゐる  
のではなく、一の建築獨奏の、オブリガートであ  
り、伴奏であらねばならぬ。

薄衣の、青いベールをかぶつた、靄の夜が来る

と、高い高い、圓頂屋根が、虚空に藻掻く妖女の如に見えたり、無雜作に開かれたる、窓と窓とが建築物を支離滅裂にしたりする。

民家の燈光が、ステージの脚光とすれば、観客は、茫然として、自失するであらう。

大地より湧き昇り、虚空より舞ひ下る夜の雰圍氣は、處女性の建築の、持つ美を、憶面も無く、究めるであらう。

ふらふらと、足腰の立たない、伸び上る事を知らない病人の如に、建築が見出されたり。陽炎の如に、宙宇に迷ふ、軒蛇腹が、印象第一であつたりするのは、何故であらうか？

統一洗練されたる、建築物の外廓は、闇の夜の幽かなる大明りの中にあつても、不盡の美の情熱を放射する。

崇高玄妙なる、建築の夜の、交響樂が、闇と燈光とに、彩られたる、夢幻の儿帳を通して、聞えるであらう。

建築の對照としての、夜の世界に於ては、一面晝間、忘れられたるものが、より明確に、觀照さ

れるであらう。

建築美の持つ、夜の沈黙と、微笑との旋律が、暗闇の中にあつても、崇嚴に、價值づけられるであらう。

晝間、他の建築物によりて、刺戟索制せられてゐし觀照の、空隙を補足して、對照の、建築の本質を、味到せしめるであらう。

夜の建築の個々に就いて見れば、或ものは、飛天夜叉の如く、觀世音菩薩の如く、或ものは、祈れる如く、跪く如く、建築の個性が、否建築家の個性！が、性格が、魅惑的なる、夜の空氣に、滲み出て、美の、漫步者の魂の中に、恍惚と生きるであらう。

夜のブランの上に現るゝ、氣象は、そこはかどなく儚き燈光と共に、建築物を批判し解剖する。陰の中なる影。燈の奥なる光り！は塊としての建築の、本質にまで、玲瓏白玉の如き、心耳を傾けさせるのである。

夜の、コントラストの唄ひ手に就いて、建築が何故歪になつて見えるか？その理由を、耳をかた

むけて、聽聞するがいゝ。

美の、對照としての建築への無理解。

塊としての建築の、本質への無意識。

建築家の、建築への、態度。建築家の個性の、

建築への藝術的表現——憧憬の問題がある？

建築の、構造美が、建築美にとつては、重大な

る役目を持つ事に於ては、論を俟たまいが、一部

の構造美が、塊としての建築に、表現さるゝ建築

美の全部では無い。乍然、一部の構造美は、塊と

しての建築美への、未可知なる過程である。

一部の構造美が、塊としての建築美へ、生かし

されるか、生かしきれないかの問題である。生か

しきるゝ事は、塊としての建築美に、その構造美

が、びつたりと無くて適はぬものであり、さもない

場合には、別途を見出すより他に無い。

音楽に於ける、オブリガート、伴奏、獨奏の順

序であらう？

塊としての、建築美は、畢竟、構造美と、形而

上云ふ處の美への、建築家によりて、統一完成さ

れしを云ふのであらう。

建築美は、合理的に、而して殉情的なる胎より  
生れ出るであらう。

構造美は、建築の肉付をなし、そして美的情調  
は、建築に、靈性を具へしめるであらう。

智と靈！科學と藝術！象徴と寫實！の統一完成  
されし上に於て、塊としての建築美が、不盡の情  
熱を放射するであらう。

シンフォニーの構造が、絃樂器、管絃器、打樂  
器其他等の、組合せによつて、形式的音樂の、最  
高の位置を占むると同様に、建築に於ても、構造  
美と、形而上の美の 統一完成が、塊としての建  
築美を、造形美術最高の位置に、列せしめるであ  
らう。

科學あつて藝術なく 構造あつて音樂なき建築  
は、どんなにうらははがなく、寂しいことであらう。

夜の建築は、思索する。夜の建築は勞働する。

夜は大江を渡る微風。しづかに、建築美の、本

質の面を、そよがすであらう。

夜は忘れられたる建築美を發見する。夜は暴君

の如く、醜惡なる建築の、面皮を剥ぐであらう。

闇と燈光とは、已の來るべき方角を、定めないのであらう。夜は澎湃として來る。

夜の建築美の、シンフォニーは、人々の心耳をさどくするであらう。

夜は、夜の建築美を讃頌する。

暗い地平と、氣遠い燈光とを配景に、降りつもる雪の白銀。おゝ遙かなれども強く、近けれども妙なる、心耳に傳はる、建築美のシンフォニー。

オリヤンは、獅子の裘を、まどひ、混棒を手にしたまふ、初戀の美を忘れ兼ねて、ブリーアデーズの後を、永久に追ふているといふ。

誠に、夜の建築美を、頌へ、慕ふ心は、建築家にどつては、かの、オリヤンが、ブリーアデーズの美を慕ひて、永久に後を追へるが如き、果敢きことでなからう。

一三、三、二

ふつと目して眼につけるかも

黒塗りの一閑張に

うつれる青葉

# 通俗建築講演會を聴きて

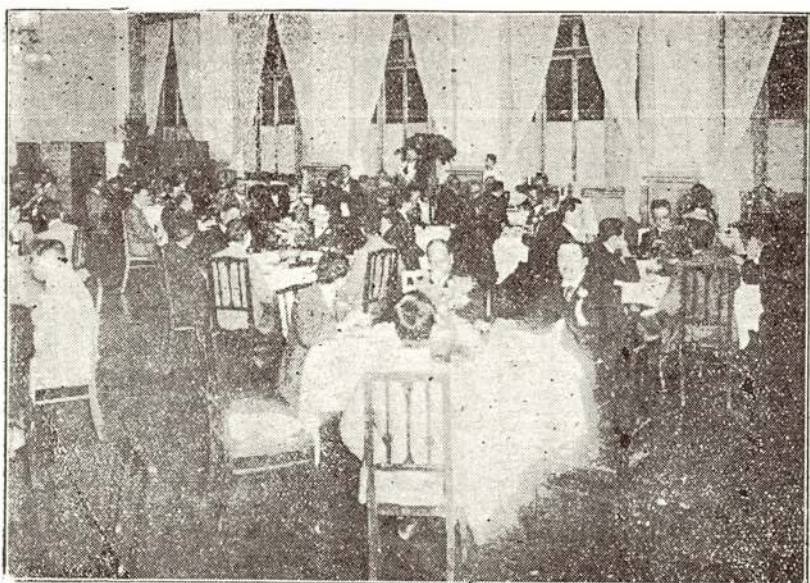
江 村 郊 邨

◆濃ひ春は盛りの花に粧ひつ、近く春宵の一刻を惜まるるきのふけふ、總會に講演に、かたの通り紅白の色取り々々に襟を飾るも春なれや、その閑け行く彌生の一宵、「通俗建築大講演會」と銘打ちて過ぎにし東都の苦き體驗を、此處に春氣分で少々閑和してみようといふ日本建築協會の催しは年中行事の春の催しものとして、ちよつと異色に富むたそれであつた。

◆建築と謂へば、大概ね人の實生活のプランには餘り這入つてない癖に、大きく云はゞ、實生活の凡てが之に濃い關係を有つてゐるにも拘はらず生活階段の一等高い棚、平生餘り取り卸しもしないような棚の上へ載つけて、一向無關心であつたのが、その棚の上からおツこちて來た「住宅難」といふ奴で強かに頭を打たれて、今さらびツくり、聊か寢呆れ眼の態たらくであつた處へ、足元から

の大ぐらづきに、鯨公のいたづらは、今度こそ、寢呆れ眼から屹ツとなつた日本の兄弟達は、今さら棚の上から「建築」を取り卸して、俄に堆塵を拂ふやら、垢の汚れを洗つてみるやら、今更らでも眞劍に帶を締直したのは結構な事であつた。

◆四月十二日と云へば、彌生の盛りどきであるその日、大阪中央公會堂で行はれた件の講演に夙くから聴衆がひし々々と詰め掛けたのは、やッばし頭を叩かれたのど、足元の波打つたお蔭だ、として置かう。何しろ、杵屋連中の喉と糸を聴かうといふのでもなければ、例の「世界提琴界の第一人者」てな大風呂敷に包まれようとするのでもなく、頓と世界の異つた——是は内所話だからそつと云つて置くが少々沒趣味な——建築話に、定刻前から聴衆がざつと一杯とは、まツたく以て近來魂消た事だと云つてよい。



大阪ホテルに於ける日本建築協会の春季大會晩會

◆プログラムの取り合せは、先づ成効だ、少々安っぽい感はあるが、それにしても、オーグスト・ト・ト・ト——管絃樂でもないから「擬ひ」としておかうの擬ひ音樂で入れて聴衆を倦ませなかが——そつたお手際は、建築家さん却々隅に置けまへんせ

◆聽て、講演のおあしらいに入れた活動寫眞が始まつた。追に聴衆——いや觀衆は嬉しそうな拍手で迎へた。委員達のヒルムを繰る音、お約束のピリッ、建築家さん咄いぞ！

◆残念な事には、説明抜きのだんまりだつたから、何處の光景で何んだつたか判らないが、大阪や上海邊り、遠くは米國邊りの都市交通の状況から、外國の公園など、次から次へ目新しい處が展開された。

◆家屋の建築を設計事務所へ頼みに行つてゐる處から、愈々建築に掛る順序などを現はしたのは所謂「名監督ドウデモヨイ氏の卓絶な作品コケオドシー會社が我國に於て初めて封を切つた」などと、そこらの低級なファンを嬉しがらせるものよ

りは、餘程有益なものであつた。

◆階段を登つて行くと、忽ちに手摺りが折れ、階段が瓦落々々と壊れ、屋根が落ちたり床が抜けたりドアが倒れたり、何んのことはないそこ邊りに在りそうな安普請の借家に見る悲惨な滑稽を、も一つ廓大した畫面などは觀衆を唸らせた。

◆斯うして聽衆を欣ばせて居る中に、聽衆は増々詰め掛けた。最後のヒルムを終ると、かたの通り演壇は燦ゆいほごな照明と、季を誇り顔な挿花とをもて、場を撼がす拍手に迎くられつ講演の場面は現はれた。

◆聽て聽衆は片唾を吞むで一言隻句をも漏らすまいとする氣配に、場内はしんとした。展開された舞臺の場面、司會者が椅子に倚り掛つて構へ込むだ有様、そのとき記者は端しなくも勸進帳の安宅の關を聯想した。「斯様に候者は、加賀の國の住人富樫の左衛門にて候、さても頼朝義經御仲不和にならせ給ふにより、判官殿主従作り山伏となり、みちのくへ御下向の由……それがし此の關を相守りかた々々左様心得てよからう。今日も山

伏來りなば謀計を以て虜となし、鎌倉殿の御心を安んじ申候。かた々々此の儀屹度聞承仕り候へ」  
「旅の衣はすゞかけの、旅の心はすゞかけの露けき袖やしぼるらん」……「時しも頃は如月の、如月十日の夜……月の都を立ち出で……」——飛むだ勸進帳になつたが、例の伊十郎張りの長唄と三味線の冴へが聞へそうであつた。

◆うツとりと開歷事を考へてゐる中に、急霰のような拍手が起つて、はつと氣が附いてみると、司會者が開會を告げるのであつた、記者は司會者の襟に挿してゐる白薔薇を大層氣持ちよう見へて、白薔薇一つがそこらの凡てとあるように見へた。そして、アレが生花であつたなら、嘸かしよい香りがするだらう、てなこと許り考へて、無暗とその花が目についた。

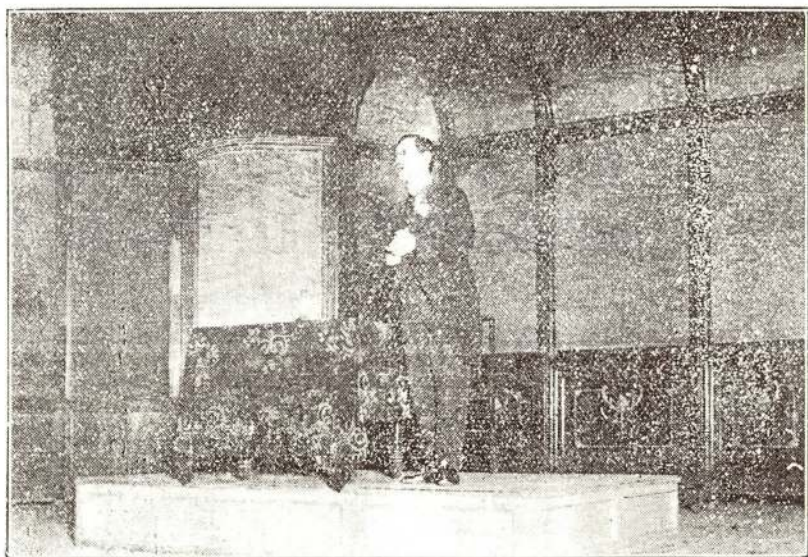
◆亦一頻り拍手の音が起つた。それは、日本建築協會理事長田實氏が、開會の辭を述べるのであつた。

◆これまで幾度も聽いたのであるが、いつ聽いても、氣持ちのよいほごに透徹した聲と、塙馴れ

た態度と巧みなゼスチュアアと、そして、理路の明澄なのは、まったく、いゝ氣持ちになれずには居れなかつた。「咄いものだ」の一言に盡きる。

◆ざつと紹介しよう。先づ、生憎天氣模様の悪いにも拘はらず多數な聴衆を得たことを、頗る碎けた調子でお禮申し、劈頭に聴衆を嬉しがらせた手際などは咄いものだ、そして。日本建築協會そのものを紹介して、

「我日本建築協會は八年以前に創立されたもので、大阪にその根拠を置いて居るが、我會は日本に於ける建築界の堅實な發展を目的として居る處の建築家並に之に關係を有する處の人々の團體である。『建築と社會』といふ題目の雑誌を毎月發行して、我々の思想の一部は之に表現されて居る。それと共に、過去の八年間に於て社會國家に多少の貢獻を爲たと信じてゐる。今その一部を述べれば、今日六大都市——否な之に引續いて二十五中都市に行はれ來つた處の都市計畫なるものは、我日本建築協會が率先して唱導し始めた處の事業である。之に次いで、一昨



池田理事長開會の趣旨を述べ

年住宅改造博覽會を催したが、住宅専門の博覽會は、我國に於ては是が始めてある。又昨年九月關東大震災の際に、我協會は、その應急策として、組式立バラックの案を作り、之を府縣並に市などに提案した。尙はその震災調査委員會を設けて、委員十七名を東京、横濱その他湘南地方に派遣し、歸來、大阪、堺、京都、神戸名古屋、岡山等にてその講演會を開いた。その他、時々講演會を開き、建築と社會の關係を論じて、國家社會に貢獻すべく努力してゐる。最近の事業としては、教化委員會を設けて、直接言論にも懇へて、建築界の改善發展を圖り、建築思想の普及に努力してゐる。』

言葉を一轉して衣食住の事に及び、住に關する處の觀念及建築に對する思想の非常に幼稚なることを云ひ、一層建築に關する思想並に智識の普及することは、現下に於ける最も切要な仕事であらねばならぬ。

◆斯う結むで、先づ、神戸高等工業學校教授古宇田實氏を紹介した——題は『趣味の建築』といふ

のである。

◆時々軽いユーモアを飛ばし、巧な形容詞を織り交せて、落い附いた調子で説き往き説き去る呼吸は、流石に手に入つたものだ。何度か往かれた歐米の趣味建築を壇上に並べ立てられたのは、望眼鏡で覗いたのではないだけに深いものがあつた。それが、歐洲の小さい半島邊りのものにも及むものだから、何んと云つても敬服せざるを得ない。

◆曰く『趣味の建築とは、時代精神を伴ひ國民性を表現した藝術的價值を有するものである。斯の意味に於て、予は、日本建築に大和魂なかるべからず、と主張したい。近時漸く盛ならむとする文化住宅なるものを見るに、その多くは歐米に於けるその模倣であつて、その文化村などと稱へてゐる住宅群の如きは、宛然、獨逸などの植民地に往つたような感がある。吾人は歐米の模倣を必ずしも不可だとは云はない。唯徒らに其糟粕を嘗め、その形骸を追ふて、その精髓を逸するを遺憾とする、趣味の岐るゝといふのは、畢竟、右するか左するか分岐に過ぎ

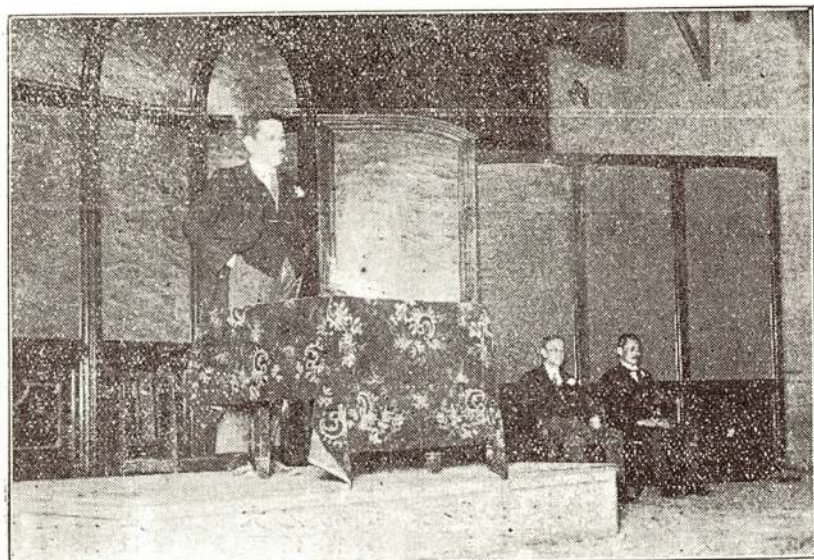
ずして、その先きでは、結局回歸一致に到達するのである。されば、我國固有の最も優秀な建築物に就いて、最も高尚なる建築趣味を味ひ、以て西洋建築の粹を解し、之を利用するならばそこに新時代の精神を表象し、國民性を發揮した處の趣味ある建築物を創造し得るのである』所謂佛心鬼手、士魂商才、國粹歐利主義ごでも云ふのだらうが、その所説にはたしかに肯かれる。ほんとうに解つたといふことは、所詮、その對象にびたりと來たことだ。も一つ強い言葉で云はゞ溶け合つたこと、飽和したことだ。日本人で日本趣味がほんとうに解らないのに、西洋趣味が解つたとは、二三が九にならない限り永劫に解けない問題だ。

◆一語一句も無駄には聴くまいとする聴衆が、古宇田氏の講演の終りに、ほつと醒めたような態度で俄に思ひ出したような拍手——左様、割れるような拍手に送り、そうして、司會者の紹介と共に、亦も急霰のような拍手に迎へられて、工學博士武田五一氏は演壇に立たれた。

◆題目は『日本に於ける住宅の變遷と其將來』といふのだ。氏の、まことに眞摯な、そして、理路の透徹した話し振りは、流石にご肯かれた。氏は醇々として説いて曰く、

『住宅の變遷は時代の風俗習慣に關係する我邦に於ける在來の住宅は、穴居の昔は別として、藤原時代の優美な生活を背景した寢殿造から、防禦一方の戰國時代の武家造威儀を主とした徳川時代の書院造、彼様に變遷し來つて、今や文化住宅なる一様式が産まれむとしてゐる。將來の住宅は、之を趣味的方面から觀て、その様式内部の設備など總て世界的風潮に支配されるのは當然であらう。又實用的方面から觀て、間取りの如きも、主もに服裝の關係から、漸次に椅子式となるように想はれる。さらに、その構造法に於いては、材料の獲易い關係から、人家の密集せる都會地は姑く措き、少くとも郊外住宅としては、木造建築が存續するものと思ふ。而もその耐火防備の方法も、決して至難事ではな

い



武田工學博士の講演

◆學的に演繹して、事實に辨證するその宏辭博引は、よく何人の耳裡にも入り易く説かれて、細かい處までも手の届いた説き振りは、奈何にもと肯かれた。亦も急激のような拍手に送られて壇を降つた。

◆『建築家の社會的地位』——次いで演壇に立てた、日本建築協會副會頭工學博士片岡安氏の題目である。いつ聽いても、あたしは开う思ふのであるが、片岡博士は、凡てに於てその説かれる規模と輪廓が大きい。流石は國策と經綸を常に口にされてゐられるだけに、いつも大局の上に立脚して達觀澄透の識は、その悠揚逼らざる態度と、布置整然たる理路と、音吐の朗々たるに於て、まさしく誰人も引き附けられない者はあるまいと思ふ。わたし達は、いつも胸の透くような氣持ちで片岡博士の座談なり又は講演なりを聽いてゐる。雷にそれ許りではない、わたしも片岡博士は、何事にも傾聴に値する一家見を有してゐられることに、竊に驚歎を禁じ得ないのである。

◆——此場合餘計な事を書くようだが、片岡博

士は今や總選舉の逐鹿場裡に立候補されてゐる。萬が一にもその選舉區民が片岡博士を逸するような事があるならば、それは、たしかに選舉區民の償ひ得ない大きな損失である。わたし達は片岡博士の當選を心より祈らざるを得ない。

◆博士は曰く、

『從來、我國に於ける建築は、所謂大工の棟梁に依つて行はれ、一般人は唯漫然と之に依頼し之を利用したゞけで、國寶として特利保護せらるゝ建築物すら、その設計者の何人であるか不明なる程であつた。維新以來凡ゆる文物制度は國際的に大發展を遂げたけれども、建築に對する斯くの如き觀念は、依然として革らず、その進歩を阻み、都市文明の發展上非常な損害を與へて、彼の東京や横濱に於ける大災害の如きも一面より見れば、建築及建築家に對する用意と理解を缺いた結果である。之を歐米先進國に就いて見るに、事實に於て、建築家は萬般の施設經營の中心となつてゐる。斯の點に於て、我國現時の状態は甚だ遺憾なものがある。どうか諸

君は、都市文明の進展を基礎的に司る者は建築であることを理解し、建築技術家の智識と手腕を利用し、信頼されむことを望む』

◆まつたく基本的の問題である。建築に育まれ建築に影響されて居ながら、それを理解しないのは、まさしく生活の悲哀である。住の改善などといふことも、斯の根本義が決まらなければ、寧ろ枝葉に屬する——拍手は頻りに起つて、その降壇を送つた。次いで、中西甚作氏が壇上に登つた。——拍手亦一頻りであつた。

◆中西甚作氏は、都市計畫大阪地方委員會の技師で、大阪府建築課に職を奉じてゐられる。都計の方から、一ケ年程歐米の都計視察を畢へて、つい先き頃飯朝されたのであるから、所謂新飯朝者として、囊中甚だ豊富なものであらう。醇厚の氏の、まことに謙遜な態度を以て、順序の立つた話し振りに、奈何にも傾聴させられた。

◆曰く「英國に於ては、住宅問題の解決に就き官民舉つて全力を注いでゐるが、就中、その民營のものに於て完全なものがある。例へば、バ

ーミンガムから數哩離れたボンビルの住宅經營會社の如き、その道路計畫から衛生設備など模範的なものであつて、家賃などは頗る低廉である。大陸に渡つて獨逸に入ると、その都市計畫は最もよく其國民性を現して、伯林市中は勿論の事、市の周圍郊外地に至るまで一齊に五階建である。建築警察の如きも徹底的に行はれてゐる。さらに、亞米利加に渡り、紐育に往くと、例のウルウォース、ビルディングを首め、幾多の高層建築が立列むでゐるが、是は、交通や衛生の上から、都市計畫としては歡迎すべきものではない。若し彼の關東大震災の如き事があつたならば、それこそ名狀し得ない大混亂を呈するだらう」

と、都市計畫の大局から説き、その齎らされた囊の口を開いて、聽衆にお土産を頒けられたのは、少からず聽衆の共鳴を惹いたようであつた。

◆斯くて、次から次へと講演は進むで來て、ついに最後の一人となつた。それは、亦一段と碎けたもので、『婦人に必要な住宅の智識』といふので

あつた。そして、講演者は葛野壯一郎氏である。

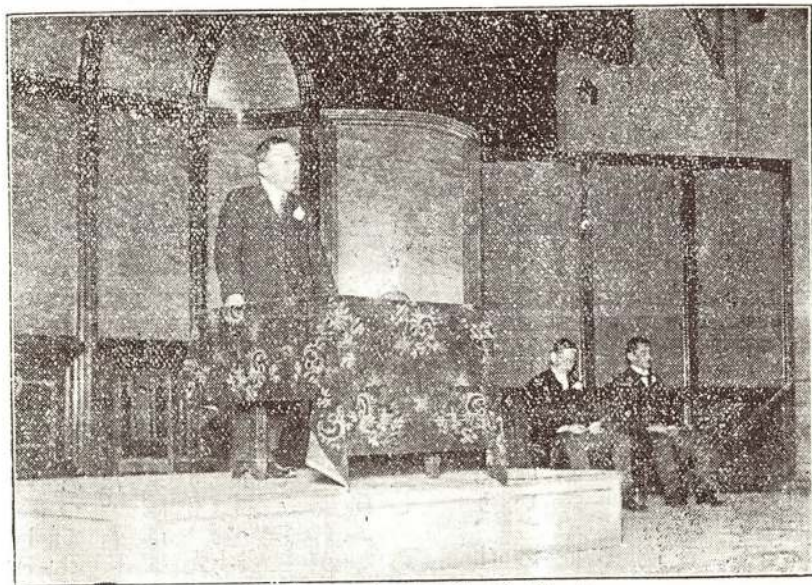
◆元來題目だけで略ぼその内容のデリケートなことを察せられるが、そういふ關係もあつてのことか、氏の斯の講演は非常に冴へてゐた。殊に『住宅建築を奈何に改善すべきか、といふ謂はばまだ普遍妥當的でない問題に懊惱するよりも、先づ現在住むでゐる住居を怎う利用して改良すべきかといふ手近きな事から始めるのがほんどうに住宅改善の徑捷である』と喝破した如きは、是れが大芝居でもあつたのだツたら、差し詰め大向ふから『イヨウ、葛野家!!』ツと來る處だ。蓋し、講演の掉尾として最も佳かつた。

◆氏は曰く『婦人が家事の主宰者であり、生活の指導者である關係上、特に住宅に就いての完全な智識が欲しい。併し、幾らその構造や設備に就いて住宅の理想を考へてみても、事實多數の人は、理想通りの住宅を得ることは不可能である。唯、その收入の容す範圍の家を求めて、その取扱ひの上から、成るべく愉快なものとするより外は致方がない。斯る考へからして、先

づ家賃は収入の四分の一に當てることを以て適當とする。即ち、百圓の收入ある者は貳拾五圓の家を求むべきであるが、日本に於て斯の程度の家は、非常に亂雜である。是れには、勿論種々な事由もあるが、その原因の一つは、例の『押入』に在ると察せられる。此の『押入』を少くして不要な物を家に置かないようにする考へが必要である。その他、壁、襖、障子、疊など内部の諸設備に就いては婦人方の注意に俟つて改良すべきものが多い。殊に臺所の配置を良くして、時間と勞力を省き、修養の餘裕を得るようにし、趣味を以て、出來得る限り家庭を藝術的に整へて行くように心掛けて欲しい』

◆斯くて、講演は畢つた。此の講演會は何しろ毛色の異つた題目の講演であつたから、聴衆の感興は新し味を覺へたようであつた。最後の講演が終ると、アンコールにも等しい最後の拍手で、講演の場面は閉ぢられた。

◆忽ち場内の電燈は一齊に消されて再びヒルムは回轉し始めた、活動寫眞が始まつたのである。



片岡工學博士の講演

◆是は立派な道路が出来上る順序を現したので林中を貫き、原野を鑿つて、コンクリート舗表に至るまでの間大仕掛けの機械を使ふて、迅速な作業は、素人達に驚歎な見ものであつたであらう。その他、亞米利加邊りの、改善されたる職工住宅の狀態を見せたのは、折柄、都市計畫といふ大問題を控へてゐる大阪市民に取つては、第三階級住

宅に就いて好箇の智識を與へたことゝ思はれる。——斯うして、徂く春の夜は、最も有意義なる幾くときを送つた。そして場に詰め込むでゐた聴衆は十二分の満足をもて散した。——煌めく街頭の夜の光りは半弦の月光に河波の碎けるさまに照り榮へて、ほんとうに佳い氣持ちであつた。

(二三、五、二稿)

### 虹の輪の

下の苗圃の

みどり哉

|      |       |       |       |          |         |          |          |          |         |
|------|-------|-------|-------|----------|---------|----------|----------|----------|---------|
| 副會頭  | 理事長   | 主記    | 主計    | 編輯       | 同       | 同        | 同        | 同        | 同       |
| 片岡 安 | 池田 實  | 設樂 貞雄 | 中澤誠一郎 | 理事 松本 禹象 | 理事 本田 登 | 理事 佐藤 彰美 | 理事 本多 二郎 | 理事 伊藤 正文 | 理事 田中 綱 |
| 編輯係  | 江村 郊邨 | 鷹 取 陽 | 庶務係   | 西 谷 節    | 鷹 取 陽   | 會計係      | 田村 春松    | 大和 榮高    |         |

|                |       |     |        |     |
|----------------|-------|-----|--------|-----|
| 合 計            | 會 員   | 三〇二 | 會員(地方) | 一一四 |
|                | 名譽贊助員 | 八六  | 終身贊助員  | 五七  |
|                | 特別贊助員 | 三〇  | 普通贊助員  | 四六六 |
| (三月二十日現在) 一〇五五 |       |     |        |     |

|    |    |       |        |                            |
|----|----|-------|--------|----------------------------|
| 本  | 冊數 | 一冊    | 十二冊    | 誌                          |
| 定  | 價  | 七拾五錢  | 九      |                            |
| 郵稅 | 貳錢 | 貳拾四錢  | 聞      |                            |
| 廣  | 告  | 料     |        |                            |
| 種別 | 金額 | 半頁 八圓 | 一頁 拾五圓 | 特別頁モ料金一定<br>シアリ御照會アリ<br>度シ |

大正十三年四月廿八日印刷  
大正十三年五月一日發行

（每月壹回  
一日發行）

大阪市外中津町下三番一九八番地ノ一

兼印刷人

江村恒一

印刷所

大阪活版所

發行所

大阪府北區堂島濱通二丁目一番地  
堂島ビルヂング

日本建築協會  
電話北四二九二番

振替口座大阪三九、九七五  
大阪市西區京町堀羽子板橋北

特約販賣店

柳々堂書店

電話(土佐堀二四四〇番)  
振替口座二〇八四番

日本建築協會々報

日本建築協會會則

第一條 本會ノ目的ハ我國建築界ノ發展ナル發展ヲ期スルニ在リ

第二條 本會ハ日本建築協會ト稱ス

第三條 本會ハ事務所ヲ大阪市ニ設ク

第四條 本會ハ人格ノ學識ノ經驗アル建築家ヲ以テ會員トス

第五條 會員ノ氏名住所ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ人會布

第六條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第七條 贊助員ヲ分テ左ノ四種トス

一 名譽贊助員ニ地位又ハ學識アル名望家

二 寄附員ニ金銀貨以上又ハ之ニ相當スル物件ヲ本會

三 特別贊助員ニ建築ニ關係スル特權ノ技術家又ハ事業家

四 普通贊助員ニ建築ニ關係スル建築家又ハ事業家

第五條 會員ノ氏名住所寄附ノ金額又ハ物件ハ各贊助員名簿ニ之ヲ

第六條 名譽贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會ニ之ヲ推薦ス

第七條 普通贊助員ハ例會ノ決議ニ依リ本會ニ之ヲ推薦ス

第八條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第九條 會員ノ氏名住所ハ會員五名以上ノ紹介ヲ以テ人會布

第十條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十一條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十二條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十三條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十四條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十五條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十六條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十七條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十八條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第十九條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十一條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十二條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十三條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十四條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十五條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十六條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十七條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十八條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第二十九條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十一條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十二條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十三條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十四條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト

第三十五條 本會ハ其目的ヲ達成シ事業ヲ援助スル者ヲ贊助員ト



## 會 報

### ○會 務

一、本協會主催第四回講習會は三月十九日より同月三十一日迄(休日三日)十日間開催致しまして聴講員壹百二十八名を算し盛會裡に無事終了するを得ましたのは本協會の欣幸とする所であります。

一、當協會本年春季大會は四月十二日舉行致しました當日開會少し前より降り出した春雨は夜中までも降り續けましたが大阪ホテルに開かれた晚餐會には名譽賛助員其他來賓六名新聞記者五名會員賛助員一四名計壹百貳拾五名の出席者がありまして近來稀なる盛會裡に政會を告げ夫より中央公會堂大集會室に於て大講演會が行はれました。來り集る聴衆壹千餘名餘興の活動寫眞灘萬のオーケストラは餘程の興を添へ午後十一時前大成功の裡に終了しました茲に役員並春季大會委員各位の多大なる御骨折を深謝致します。

一、豫て御承知の通本協會は新入會者の爲に來る五月下旬迄入會金を免除することゝ致して居りますが追々免除期間も尠くなつて來ましたから此期を逸せず御入會を御勧め下さる様希望致します

一、大阪市美術協會主催にて左記概規により第一回美術展覽會を來る五月五日より

同月二十五日迄天王寺公園内勸業館に於て開會すゝ趣で本協會へ建築部の出品に就て勧誘方を申越されました會員各位の奮て御出品を御勧め致します

會 期 第一回美術展覽會概規  
自大正十三年五月五日至同年同月

廿五日

會 場 天王寺公園内勸業館

部 類 第一部 日本畫

第二部 西洋畫

第三部 彫 塑

第四部 建 築

第五部 美術工藝

搬 出 出品 廣く一般より募集す

入 出品目録を添へ四月二十五、六、七の三日間午前九時より午後四時迄に會場内受付へ搬入せらるべし(出品目録は左の用紙を用ひられたし用紙省略)

審査委員

第一部 山口 草平氏 矢野 絳村氏

北野 恒富氏 水田 竹園氏

菅 楯彦氏

織田 明氏 國枝 金三氏

山下 繁雄氏 小出 樽重氏

赤松 麟作氏 足立源一郎氏

齋藤 貞里氏 榑原 一廣氏

大國 貞藏氏 天岡 均一氏

長谷部 銳吉氏 武田 五一氏

第四部 安井 武雄氏 古宇田 實氏

天沼 俊一氏 日高 胖氏

本野 精吾氏

第五部

金屬工藝 阪田勝美氏 大國 壽郎氏

漆器 古川一正齋氏 中島 保美氏

漆器 川合 漆仙氏 安原 祥窓氏

越田 尾山氏

陶器 藪 明山氏 吉向十三軒氏

指物 久須 來郎氏 青田 眞七氏

竹藍竹器 山本竹龍齋氏 木下 翠香氏

織物 龍村 平藏氏

刀劍 月山 貞勝氏

授賞及獎勵 優秀なる作品に對し大阪市美術協會賞を交付す

陳列品全部又は一部に對し獎勵金又は寄託賞を交付することあるべし

注意 事項

□同一人の出品は各部二點以内とし一人の占め得べき壁面は四間迄とす但し第五部の出品に限り五點以内とす

□出品には適當なる裝飾をなすことを要す

□解説を要するものは之を添付せらるべし

□無鑑査規定以外の出品は總て鑑査の上之を陳列す

□出品物は總て一個毎に必ず命題、氏名、形式(六曲一双二曲半双三幅對花瓶一對等の類)を明記せる紙片を貼付し尙別に左右一、二、三等の順序を明記せる紙片を貼付せらるべし

□既に公に陳列したることあるものは出品することを得ず

□出品物の運搬費用は往復共出品者の自辨とす

□本會の定めたる陳列に對し出品人は異議を申出ることを得ず

□本會は陳列品を撮影刊行することあるべし

□陳列作品は閉會後にあらざれば搬出することを得ず

□出品物は總て本會の通知に依る指定期間内に搬出せらるべし

□出品物は充分の注意を以て鄭重に保管を爲すも雖も不慮の損害に對しては本會其責に任ぜず

□陳列作品の賣約は無手数料にて本會之を取扱ふ

尙詳細は展覽會規定本則を參照せられたし

大正十三年一月

大阪市美術協會

一、在東京南滿洲鐵道株式會社東京支社より今回大連驛を新築するに付て其設計を左記規程に據り懸賞募集をなす趣で勸誘方を申越されまじした本件も舊て懸募を御勸め致します

尙懸募に必要な書類は本協會事務所の一部備付てありますが買費金壹圓附の上同社へ御申込あれば直に送付する筈であります

大連驛本家新築設計圖案懸賞募集規程

第一條 南滿洲鐵道株式會社は本規程に基

き大連驛本家新築設計圖案を募集す

第二條 審査の上當選者には左の等級に依り賞金を交付す

一等賞 一名 金七千圓

二等賞 一名 金四千圓

三等賞 二名 各金二千圓

選外佳作 若干名 各金若干圓

第三條 懸募設計圖案及書類は左記期限迄に到着する様東京市麹町區永樂町一丁目丸之内ビルディング内南滿洲鐵道株式會社東京支社宛に提出すべし

大正十三年七月十五日午後十時

第四條 應募設計圖案及書類は左記設計要旨に基き左の事項を具備するを要す

一、所要圖面及書類

イ 配置圖 縮尺五百分の一

ロ 各階平面圖 縮尺二百分の一

ハ 立面圖(四面共) 縮尺二百分の一

ニ 斷面圖(縱橫ノ兩斷面) 縮尺二百分の一

ホ 詳細圖(主要部分) 縮尺二十分の一

ヘ 透視圖 ワットマン全紙大

ト 說明書

二、各圖面は總て製圖原紙に墨を以て畫

三、圖面は凡て明瞭に記入すべし

四、圖面に陰影を施すことは隨意とし透視圖には色彩を施すことを得

五、圖面に記入すべき各室の名稱面積等は直接其の位置に記入し番號符號等を用ふることを得ず

六、配置圖に於ける建物平面は外線のみとし附屬建物、橋梁、線路、道路、等を現はすことを要す

七、透視圖は東方廣場より見たるものと說明書には設計の要旨、材料及構造の概略を簡單に記載すべし

第五條 應募設計圖案及書類は左記各號に依り一括して堅牢なる容器に封入し表面には應募者の暗號及大連驛新築圖案の文字を記載すべし

一、圖面及書類には署名に代ふるに每葉暗號を以てすべし

二、暗號のみを表記せる封筒内に圖面及書類の還附を受くべき者の住所氏名を明記したる紙片を封入すべし、猶ほ該封筒内には別封として應募者の住所氏名及暗號を明記したる紙片を封入し其表面には當該暗號のみを記載せるものを作り之を封入すべし

第六條 應募者はにして當選せざるべきは前條第二號の別封は開封せず

第七條 應募者にして設計圖案及書類提出後住所氏名に異動を生じたるときは其都度第五條第二號に準じ「懸賞圖案應募者異動通知」の文字を表面に朱書したる書面を以て東京市麹町區永樂町一丁目九ノ

内ビルディング内南滿洲鐵道株式會社東京支社宛通告すべし

第八條 應募に關する費用は一切應募者の負擔とす

第九條 應募したる設計圖案及書類は左記審査委員會長及審査委員を以て組織する審査委員會之を審査す

審査委員會長 滿鐵社長 川村竹治  
審査委員 建築學會長 學博士塚本 靖  
同 東京帝國大學教授工學博士佐野利器  
同 早稻田大學教授工學博士佐藤功一  
同 東京高等工業學校教授岡田松韻  
同 早稻田大學教授吉田亨二  
同 鐵道省建築課長久野 節  
同 鐵道技術委員長武村 清  
同 鐵道部長藤根壽吉  
同 計畫課長根橋禎二  
同 建築課長岡 大路

第十條 審査は滿鐵東京支社に於て行ひ大正十三年八月十五日迄に結了するものとす

第十一條 當選者の氏名は建築學會、日本建築協會、滿洲建築協會の各機關雜誌及東京朝日、東京日日、報知大阪毎日、大阪朝日及滿洲日日、遼東、大連の各新聞紙上に於て發表す

第十二條 審査に關與するものは募集に應じ若くは應募者に幫助を與ふことを得ず

第十三條 審査委員會に於て左記各號の一

に該當するものと認めたるときは其設計圖案を審査せず

一、他人の意匠を剽窃し若くは模寫せるもの

二、不正の手段方法に由りたるもの

三、第三條の期限に遅れたるもの又は第四條、第五條及設計要旨の要件を具備せざるもの

第十四條 審査に對しては説明を求め又は異議を申立つることを得ず

第十五條 賞金は之を本人に交附す、死亡其の他の事由に依り本人に賞金を交附すること能はざるときは南滿洲鐵道株式會社に於て其の交附すべきものを決定す

第十六條 當選したる設計圖案及書類は南滿洲鐵道株式會社の所有に歸する者とし

第十七條 應募設計圖案及書類は審査結了後公衆の展覽に供することあるべし

第十八條 當選せざる設計圖案及書類は南滿洲鐵道株式會社の費用を以て之を還附すべし

第十九條 南滿洲鐵道株式會社は應募設計圖案及書類の保管及還附に關し充分の注意をなすべし雖も萬一損害を生じたる場合には賠償の責に任せず

第二十條 設計要旨其他に關する質疑は「懸賞質疑」の文字を朱書し大連市南滿洲鐵道株式會社地方部建築課宛照會すべし

設計要旨

一、建築敷地は大連市兒玉町及大山通間に

於ける鐵道附屬地（日本橋際）にして添附せる配置圖の點線内任意の位置とす

二、敷地は軟岩質にして安全地耐力は三十糎平方（尺平方）に付約五噸と假定す  
三、建物は地階共四階建以内にして其高さ路面上二十六尺以上とし總面積は約一萬三千六百平方米とす  
四、建築費は暖房其の他の附帶工事を除き約百七十萬圓とす（大連に於ける建築工費は低廉にして内地に比し其の六割位なり）

五、建物は鐵骨又は鐵筋コンクリート造とし、耐火構造たるべし

六、添附圖面は各室面積其の他の參考に供するに過ぎざるを以て間取等は應募者の任意たるべし

七、添附圖面に記入したる寸法は變更することを得ず

八、添附圖面に示したる線路の位置は變更することを得ず

九、第一階外壁の各出入口には何れも適當なる庇を設くるを要す

一〇、地階線路附近には添附斷面圖に示せる外、柱又は壁を設くることを得ず  
一一、各室の採光及通風は充分考慮するを要す

一二、大連は外氣攝氏零下十八度内外に下ることあるを以て室内保温のため構造に注意するを要す

一三、便所は凡て洗滌式（水流し便所）とす

一四、停車場本家と日本橋との間は全部鐵筋コンクリート床を以て被覆するものとす

一五、停車場本家と道路との間は鐵筋コンクリート床を以て被覆するか又は盛土にて路面と略ぼ同一の高さになすものとす

## 會 合

### ○春季大會委員會

△日時 三月十九日午後五時 九時二十分

△會場 本協會會議室

△出席者 委員長 宗藏  
委員山脇友三郎、下浦光衛、瀧邦一、阪井米吉、平塚鎭吉

役員池田理事長、中村理事

△議事 一、庶務係委員缺員に付補充の件  
委員瀧戸強三郎氏鈴木甫氏は上京中に付補充として古井長七、三浦茂兩氏に委員

依囑のことに決定  
一、講演者及希望演題に關する件  
講演を左の通依囑交渉することに決定

司會者

開會の辭

趣味の建築  
日本に於ける住宅の變遷と其將來

武田五一氏  
片岡 安氏  
歐米旅行談  
中西甚作氏

婦人の建築に對する演題葛野壯一郎氏  
閉會の辭  
宗委員長

一、庶務係に於て研究事項の件  
宣傳方法  
立看板、新聞記者招待、電車内廣告、入場券の配付等

一、其他左記雜件に付協議決定せり  
1、大會當日時間勵行のこと

2、來賓席會員席婦人席一般席を設くること

3、活動寫真機及フィルム借入のこと

4、會場整理に關すること

5、三月二十四日會場及庶務係の小委員會開催のこと

9、三月廿六日本委員會開催のこと

7、徽章に關すること  
8、宴會に關すること

### ○教化委員會分科會

△日時 三月二十四日午後五時 九時

△會場 中山文化研究所會議室

△出席者 委員長古宇田實  
委員岡部文雄、小笠原し、酒井勇三郎、澁谷五郎

△議事 一、建築職工教化事業に關する件  
1、現在建築職工の教化方法  
2、幼年職工の教化方法

二、講演事業に関する件

- 1、会場設備に関する件
- 2、講演方法に関する件
- 3、簡易なる學校創設に関する件
- 4、豫算に関する件

○春季大會小委員會

△日時 三月二十四日午後六時—九時十分

△會場 本協會會議室

△出席者 委員長 宗兵藏

委員 今林彦太郎、瀧那一、柳下實、松永

次松、三浦茂、吉井長七

役員 池田理事、中村理事

△議事 一、入場券付講演順序書印刷に関する件

する件

一、右柳付方の件

一、案内狀文案に関する件

一、宣傳用立札文案に関する件

一、新聞記者招待に関する件

一、速記者及寫眞師に関する件

一、徽章作成に関する件

○春季大會委員會

△日時 三月二十六日午後六時—九時三十分

△會場 本協會會議室

△出席者 委員長 宗兵藏

委員 今林彦太郎、呼子正、瀧那一、村上

武、松永次松、小林三造、阪井米吉、平

塚鎗吉、三浦茂、吉井長七

役員 中村理事、伊藤理事

△議事 一、入場券配付の件

配付先取調の上決定

一、入場券配付数の件

一、新聞記者招待に関する件

一、開會日を四月十二日(土曜日)と變更

の件

本件は會場の都合を以て變更の止むな

きに至り協議の上變更することに決定

○教化委員會

△日時 四月二日午後六時—八時三十分

△會場 本協會會議室

△出席者 委員長 古宇田實

委員 井上新二、關部文雄、姫野武

△議事 一、派遣講演謝禮に関する件

一、講演者に對する謝禮の件

一、次回本委員會を來る四月十六日開催

のことに決定

一、次回の議案に関する件決定

○春季大會委員會

△日時 四月四日午後六時—十時

△會場 本協會會議室

△出席者 委員長 宗兵藏

委員 呼子正、瀧那一、柳下實、八木幸次

郎、松永次松、小林三造、阪井米吉、下

浦光衛、三浦茂、須川廉太郎

役員 池田理事、中村理事

△議事 一、新聞記者招待に関する件

市内各新聞社に付方面を別ち宗、柳下、松永の三委員分擔訪問することに決定  
其他の新聞社へは招待狀郵送することに決定

一、其他招待狀發送先の件

一、オーケストラ備入れの件可決

一、晚餐會受付に関する件

一、來賓接待に関する件

一、建築關係學校へ聴講勸誘方の件

○理事會

△日時 四月七日午後五時—九時三十分

△會場 本協會會議室

△出席者 池田理事長、中村理事、伊藤理事

△議事 一、會員中西甚作氏歸朝歡迎會に

關する件

一、四月例会に関する件

本月は春季大會を舉行するを以て例會

は取り止むことに可決

一、第四回講習會講師謝禮に関する件可

決

一、第四回講習會講師慰勞會に関する件

可決

一、職員退職給與支給の件決定

一、會員銓衡

入會賛助員二名、退會々員一名

○春季大會晚餐會

△日時 四月十二日午後五時—六時三十分

△會場 大阪ホテル

△出席者 名譽賛助員 本山彦一氏、大槻龍

治氏、岡胤信氏、村山龍平氏代理、杉本又三郎氏、工政會理事長代理倉橋次郎氏、各新聞社、關西日報社、日本建材新聞社、大阪今日新聞社、工業評論社、工業之日本社

講演者 片岡安氏、葛野壯一郎氏、武田五

一氏、中西甚作氏、古宇田實氏

役員 池田實氏、本多二郎氏、中村琢治郎

氏、中澤誠一郎氏、松本禹象氏、佐藤彰

美氏、設樂貞雄氏、伊藤正文氏、

春季大會委員 委員長宗兵藏氏、今林彦太

郎氏、呼子正氏、瀧邦一氏、村上武氏、

山脇友三郎氏、柳下實氏、八木幸次郎氏

松永次松氏、福永佐和吉氏、小林三造氏

阪井米吉氏、下浦光衛氏、平塚鎗吉氏、

三浦茂氏、須川康太郎氏

會員贊助員 泉谷千秋氏、井上新二氏、橋

本舞介氏、伴武夫氏、橋本政吉氏、原田

金次郎氏、西原修三氏、朝永國次郎氏、

豐島義政氏、置鹽章氏、岡本新次郎氏、

小笠原朝氏、小川安一郎氏、小川久市氏

奥村伊次郎氏、川村種三郎氏、河村茂氏

河村藏氏、川島甚兵衛氏、河村新氏、

橫濱勉氏、多田學氏、竹中藤右衛門氏、高

松吉三郎氏、武田經一氏、谷民藏氏、瀧

村松之助氏、田島長二郎氏、坪井誠一氏

角尾篤彦氏、長澤榮作氏、中川孫八氏、

村井季四郎氏、浦英之助氏、能村知二氏

野呂長四郎氏、久保田小三郎氏、黒住福

三郎氏、久保田繁亮氏、工藤壽男氏、久

保田種吉氏、熊取谷熊次郎氏、山添繁造

氏、山崎英二氏、山中宗三郎氏、安井武

雄氏、前田清二氏、前田武夫氏、松室重

光氏、增田直一氏、前内文二郎氏、藤村

武氏、古橋剛九氏、藤井厚二氏、藤村愛

資氏、藤田友太郎氏、小西一夏氏、小林

悉氏、作山義弼氏、酒井勇三郎氏、木子

七郎氏、木村梅次郎氏、推原兵市氏、宮

崎治三吉氏、宮本長治氏、光安禎之助氏

宮岡克二氏、新海正綱氏、篠崎兼二氏、

鹿村萬吉氏、清水榮二氏、清水準人氏、

日高胖氏、廣岡孝太郎氏、森萬次郎氏、

森本藤吉氏、毛利泰三氏、瀨戸文吾氏、菅

谷一郎氏、鈴木興五郎氏、園部文雄氏、上

田辰三氏、高松秀行氏、古谷雅一氏、山中

茂一氏

△記事 一、來會者は一先ブヘランダーに

て休憩をなし定刻來賓會員其他一同食堂

に入り三々五々圓卓を圍み着席直に晚餐

を共にす宴酣にして片岡副會頭立つて一

場の挨拶を述べ次いで名譽贊助員本山彦

一氏來賓を代表して祝辭あり一同立つて

祝盃を挙げ本協會の萬歳を三唱して本會

の益隆盛發展を祝福す

一、本夕は折惡しく暮方前より春雨じとし

と降り出し來會者の足を阻まれしも會

するもの百二十餘名近年稀なる盛會にし

て一同宴後快談縱橫各自歡を盡し和氣露

々の裡に散會し中央公會堂大講演會場に

歩を移したり

## ○春季大會通俗建築

### 大講演會

△日時 四月十二日午後六時三十分—十時

半

△會場 中央公會堂大集會堂

△記事 一、本日は朝來曇天にして開會前

より春雨降り出し聽衆の足を阻まれんか

と吾人の頭を痛めしむ會場の諸準備整ひ

開會半時間前より餘興の活動寫眞及滌萬

のオーケストラを交互に開始す定刻とな

るや宗委員長司會の下に池田理事長開會

の辭を述べ講演を左の順序に始め拍手の

裡に了る

司會者 春季大會委員長 工學士 宗 兵藏君

開會の辭 日本建築協會理事長工學士池田 實君

趣味の建築 神戸高等工業學校教授工學士古宇田實君

日本に於ける住宅の變遷と其將來 京都帝國大學教授工學博士武田五一君

建築家の社會的地位 日本建築協會副會頭工學博士片岡安君

歐米旅行談 大阪府技師工學士中西甚作君

婦人に必要なる住宅の智識 葛野建築事務所長工學士葛野壯一郎君

一、次で宗委員長閉會の辭を述べ豫定の

處病氣の爲中村理事代りて之を述べ餘

與の活動寫眞に移り十一時近くに閉會した

、本夜降雨の折にも拘らず聴衆階上階下無慮一千餘名を算し婦人の聴講者も多數交りて稀有の大盛會裡に終了したるは欣喜に堪へざるに同時は大會委員の勞を多とする所なり

### ○緊急理事會

△日時 四月十二日午後八時—八時半

△會場 中央公會堂講演會役員室

△出席者 片岡副會頭、池田理事長、中澤理事、設樂理事、中村理事、佐藤理事、本多理事、伊藤理事

△議事 一、帝都復興聯合協議會に本協會加入に関する件

本件は本日春季大會に付工政會理事長代理として常務理事倉橋藤次郎氏來會ありて申出られしもの協議の結果加入することに可決し口頭回答せり

### ○新入會員

(會員)野間亮平君

(終身贊助員)桐田登君

(特別贊助員)高橋清光君

### ○退會會員

(會員)森田文二君

### ○住所、勤務先移轉

原田覺三君 岡山第十七師團經理部

森與助君 大阪第四師團經理部

田中直造君 東成郡複重町野江中ノ町六五

根岸元治君 東京市本所區綠町二ノ二三

中川將君 高松市宮脇町高松高等商業學校

内文郡省建築課高松出張所

宮本傳次郎君 京都市上京區紫竹芝本町

島本四郎君 東京市小石川區金富町四〇番

地竹中の方 岡山市上石井二六五番地堀内

福松方

松田茂樹君 和歌山市湊一四四ノ六

大野竹一君 東京市京橋區金六町一二松井

小泉爲次郎君 三島郡吹田町大日本麥酒會

社社宅第四號辻米太郎方

古塚正治君 兵庫縣西宮町川東五五六四ノ

一 前田清二君 東成郡古市村今市一一三二

中川廣君 東京府下大森入新井町不入斗四

五六

中島春次君 西成郡玉出町字田ノ川八九二

澁川彦衛君 神戸市西須磨四ツ辻一〇鐘紡

社宅二號 辻鐵君 大阪市西區築港八幡屋町一二二ノ

九 友田薫君 東京市芝區三田臺町阿部美樹志

事務所内

藤原節雄君 東京市麴町區永樂町一丁目一

番地大林組東京支店

小西武雄君 東京市麻布區新廣尾町一五二

大和閣内七號室

藤原數市君 西成郡玉出町四八〇番地

上谷利夫君 兵庫縣佐用郡大廣村ノ内末廣

小松靜君 東京市芝區三田四國町二番地一

號地中村大夫方

藤野松九郎君 東京市牛込區新小川町一丁

目一七番地荒井松治方

### 寄贈圖書

土木建築三號 日本實業興信所

建築畫報四號 同社

住宅四號 住宅改良會

庭園三號 同協會

趣味之園藝三號 關西園藝會

建築雜誌三月號 建築學會

活人三號 活人社

建築新潮四號 洪洋社

建築の普及三號 帝國工業教育會

日本美術協會報告十三輯 日本美術協會

大阪土木建築五十號 同組合

藥組合報 住宅研究三號 文化建築社

朝鮮と建築三號 朝鮮建築會

滿洲建築協會雜誌特別號同 協會

工業評論三號 同社

## てい就に物版出

曩に廣告致しました關東地方震火災視察  
報告書は目下頗りと編纂中にして遠から  
ず發刊のことに取運びますから御承知置  
きを願ひます

日本建築協會

●第七集第五号 掲載広告一覽 (掲載順)

岩住金庫鉄工所  
日本エレベーター製造  
大野正營業所  
阿部鉄工所  
ミドリ商会  
飾磨化学工業  
大塚鉄工所  
野沢幸三郎商店  
瀧山商店  
宇野耐火煉瓦  
小山  
福田製作所  
原田商会  
西孫南店  
特許エレベーター製作所  
東京電気  
田中昌司商店

二和商会  
南満鉱業  
文化工業  
ボールイー・サンマン事務所  
日本ベイント製造  
石綿スレート  
吉岡商店  
高谷商店  
山本東作商店  
田村商会  
建築金物商会  
日本洋瓦大阪出張所  
金剛商会  
今井硝子店  
横河橋梁製作所  
大平工業所  
HANKEN SEISAKUSYO

井筒政藏商店  
日本ホロタイル  
鈴木商店  
青木浦石材  
柳生電機製作所  
森川組  
日本メタルラス製造所  
大福海上火災保険  
桜工業  
浅海商店  
出浦建築事務所  
大阪建築所  
新海建築工務所  
小笠原建築事務所  
渡辺建築事務所  
葛野建築事務所  
片岡建築事務所

片岡松井建築事務所

横河工務所

横浜建築事務所

竹内建築事務所

宗建築事務所

中村建築研究所

国枝工務所

安井武雄建築事務所

柳下建築事務所

真水工務所

真水三橋建築事務所

増田清建築事務所

遠藤於菟

木子建築事務所

設楽建築工務所

茂、野村建築事務所

岡部建築事務所

前田松本建築事務所

西原衛生工業所

大阪窯業

池田勘藏

日本土木大阪出張所

大阪橋本組

大林組

竹中工務店

長瀬組

中新

佐伯工務所

野村組

久保田組

熊取谷熊次郎

山本組

松村組

藤木正一

正木工務店

小西組

鴻池組營業所

有山組

駒井喜兵衛

安藤組大阪出張所

辰巳吉之助

森本建築社

清水組大阪支店

錢高組

清水福太郎

東京建鉄大阪支店

山田大理石製作所

矢橋大理石商店

須賀商会

大理石工業

榮進社

松尾

山本窯業商店

萩原煖房工務所

新田ベニヤ製造所

河村青写真調製所

宇野沢組ステインド硝子製作所

品川白煉瓦

日本木材工芸

高島屋呉服店

コルク工業

ベニス工房

木下商店

城口汚水処理研究所大阪支店

米本栄商店

大阪青写真調製所

浜口商店

大阪耐火リノリウム工業

岩崎商業

小野田セメント製造

日本建築紙工大阪出張所

日本工剤

高田商会

政正

関西ステイント硝子製作所

旭硝子

淡陶

川崎工場

サカイブシ建築鉄工所

田中タイリング商会

内外土木建築材料

工藤電気工務所

境川文庫

岡部商会

日米板硝子

星製菓

桐田商会

田中源太郎商店

極東板硝子工業